

経済産業省
令和5年度被災地域の経済産業活性化対策調査
(福島浜通り映像・芸術文化プロジェクトの更なる発展に向けた調査事業)
事業報告書



目次

● 表紙	01
● 目次	02

1 事業概要

・ 本事業実施の背景例	04
・ 本事業実施の概要	05
・ 本事業のアドバイザー	06

2 座談会／編集会議の実施

・ 座談会／編集会議の目的と目標	08
・ 座談会／編集会議の開催概要	09
・ 座談会の目的	10
・ 座談会の実施内容	11
・ 座談会 ディスカッションのサマリー	13
・ 編集会議の目的	17
・ 編集会議の実施内容	18
・ 編集会議 ディスカッションのサマリー	22

3 ハマカラMAPの制作

・ ハマカラMAP	24
・ アドバイザーからのコメント	27

4 事例調査の概要

・ 事例調査の目標と目標	29
・ 調査方法	30
・ 調査結果の編纂について	31

5 調査対象事例の選定基準

・ インタビュー調査対象選定のために	33
・ インタビュー調査対象事例と選定理由	34
・ インタビュー調査のヒアリング項目	39

6 事例別 文化芸術×まちづくり 成功のための工夫

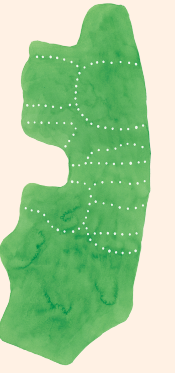
・ L'Aquila Film Festival	41
・ Prospect New Orleans	42
・ PASSAGES INSOLITES	43
・ 大地の芸術祭	44
・ みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ	45
・ アウトクロップ	46
・ なら国際映画祭	47
・ 下町芸術祭	48
・ BEPPU PROJECT	49
・ Reborn-Art Festival	50

7 ヒアリング項目別 インタビュー어의回答録（抜粋）

・ 地域コミュニティとの連携について	52
・ 地域性（その地域らしさ・魅力）の活かし方について	58
・ 活動が持続・成長する仕組みについて（運営体制）	64
・ 活動が持続・成長する仕組みについて（広報・資金繰り）	70
・ 文化芸術と地域振興におけるアートの扱いについて	76
・ 今後の展望について	82

事業概要





本事業実施の背景

平成23年3月11日に発生した東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所（以下「福島第一原発」という。）事故以降、被災地における除染活動、福島第一原発の廃炉・汚染水・処理水対策に向けた取組が継続され、被災地の避難指示区域の解除、避難指示が解除された区域における事業の再開など、復興に向けた動きが加速している。

一方で、福島浜通り地域においては、いまだ避難指示が続く帰還困難区域が7市町村（双葉町、大熊町、浪江町、富岡町、飯舘村、葛尾村及び南相馬市）にまたがっており、引き続き、政府として当該地域における復興を最重要課題とし、取組を加速させることが重要である。

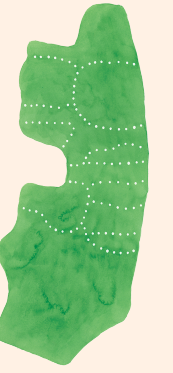
また、福島浜通り地域においては、企業誘致やなりわいの再建など企業活動への支援を中心としてこれまで取組が行われてきた一方、地域住民の「心の潤い」をもたらすような施策については検討・実行が進んでおらず、特に今後住民の帰還や新たな人口の呼び込みが期待される、福島第一原発の事故に伴い避難指示等の対象となった12市町村（帰還困難区域がまたがる7市町村に、田村市、川俣町、広野町、楡葉町及び川内村を加えた地域）においては、そうした従来とは異なるアプローチが必要である。

こうした背景を踏まえ、経済産業省では、福島浜通り地域における映像・芸術文化関連の様々なプロジェクトを展開してきた。これらのプロジェクトを進めていく中で、地域関係者（※）の意見を受け止めながら取組を進めている例がある一方で、

- ・ より多くの地域関係者との交流が必要と考えられること
- ・ 各活動における目的や手法、分野の違いにより活動同士の連携が十分に行えていない例があること
- ・ 12市町村内であっても地域によって取組に対する受け止め等に一定の差異があること

などの課題が明らかになってきたところである。

※本事業における「地域関係者」とは、例えば福島浜通り地域12市町村の職員や住民、当該地域においてまちづくりを既に行っている者をいう。



本事業実施の概要

経済産業省が展開する映像・芸術文化関連のプロジェクト全体としては、福島浜通り12市町村におけるまちづくりの方向性との親和性が高い形で、当該地域の活性化に資する取組として進めること、また各種プロジェクトを通じて当該地域内各市町村のまちづくり活動のさらなる連携や活性化を図ることを目的としている。

本事業では、プロジェクト全体を総合的に勘案した方向性を検討し、地域関係者が主体性を持って参加でき、域外の人々も参加することのできるプロジェクトにしていくため、

- (1) 映像・芸術文化を通じたまちづくりに関する事例調査・有識者へのヒアリング
- (2) 地域関係者との対話を通じた想いの共有
- (3) 本事業を含めた、現在経済産業省が浜通り地域で展開している映像・芸術文化関連の各種プロジェクトの認知向上
- (4) 今後の映像・芸術文化を通じたまちづくりに関するビジョンの可視化

に取り組んだ。



本事業のアドバイザー

本事業の円滑な進行を支えるために、事業アドバイザーとしての専門家を選定して参画いただいた。

事業アドバイザーの選定のために、以下の観点を設定。これらの観点にまつわる具体的な知見を豊富に持つ人物を選定した。

- ・ 地域における映像・芸術文化に関連する事業や推進する組織にどのような課題感があるか
- ・ 映像・芸術文化における街づくりの事例を収集するにあたってどのような評価指標を設定すべきか
- ・ まちづくりにおける映像・芸術文化に関連する事業が担う役割とは何か
- ・ 映像・芸術文化におけるまちづくりで実践すべきこと（もしくは気をつけるべき点など）
- ・ 他地域の事例におけるアプローチ、独自の手法、文化・体制づくりなどのノウハウ
- ・ 他地域の事例において、独自施策を通じてどのような成果や効果がもたらされているか
- ・ 福島（特に浜通り）における芸術文化活動の現状や今後の展望について



本田 勝之助

本田屋本店有限会社 代表取締役

福島県会津若松市生まれ。東日本大震災直後、福島県へのアクセントア社の誘致と以降のスマートシティを推進。福島県被災12市町村の100事業者支援の全体プロデューサーをはじめ、全国の原子力発電所立地地域約20地域、100地域以上の日本遺産認定地域の統括プロデューサーとして、担当プロデューサーやクリエイター、コンサルタントなどをプロジェクトチームとしてまとめ、事業を推進している。

選定理由

事業者視点でのまちづくりに関わってきた経験があり、芸術文化活動を含むさまざまなプロジェクトにおいて、福島県内の広域で活動している専門家としての視点でのアドバイス及び体制構築に向けた人的ネットワークの構築支援などの期待から選定した。



関口 正洋

株式会社アートフロントギャラリー

神奈川県横浜市生まれ。東京大学医学部保健学科卒業。大手金融会社を経てアートフロントギャラリー入社。「大地の芸術祭2000」の事務局として、アーティストと地域のコーディネート、ボランティアのマネジメント、企業協賛の募集などを行う。その後、NPO法人越後妻有里山協働機構、新潟県十日町市の文化施設〈まつだい「農舞台」〉、「空き家プロジェクト」の立ち上げなどに関わる。2014年より奥能登国際芸術祭のプロジェクトマネージャーとなり、現在は令和6年能登半島地震の復興に携わる。そのほか、パブリックアートワークの企画・制作にも従事。宅地建物取引士、中小企業診断士。

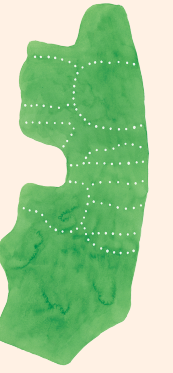
選定理由

国内のさまざまな芸術祭にプロジェクトマネージャーとして関わってきた経験を持ち、芸術文化活動と地域との関係性づくりなどの観点においての知見を有する専門家として選定した。

2

座談会／編集会議の実施





座談会／編集会議の目的と目標

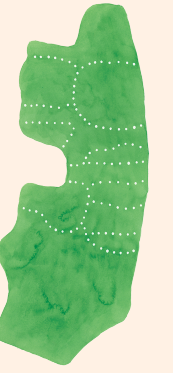
目的

地域関係者との対話を通じた想いの共有、及び、本事業を含めた、現在経済産業省が浜通り地域で展開している映像・芸術文化関連各種プロジェクトの認知向上

目標

- 地域関係者との信頼関係を構築する
- 各種プロジェクトの福島浜通り地域内外における認知度を高める
- 多種多様な属性を持つ人物が本事業の認知を通じて福島浜通り地域の復興・発展について主体的に取り組む





座談会／編集会議の開催概要

実施事項（8week／2023年11月15日～2024年1月15日）

座談会に向けた
テーマ設定会議



座談会



ハマカラMAP案の
作成



編集会議

1/21（土）
オンライン会議

すでに地域で活動する芸術関係者を呼び、座談会で話し合いたいテーマについて語り合った

1/27（土）
双葉産業交流センター

すでに地域で活動する芸術関係者を呼び、現在の取組の共有や今後の浜通りについて語り合った

1/27～2/11

座談会で出た芸術文化関係の取り組みや今後行っていきたいアイデアをもとにハマカラMAPを作成した

2/11（日）
Jヴィレッジ

ハマカラMAPをもとに、芸術関係者に関わらず、幅広い立場の方と今後の浜通りについて語り合った

座談会の目的

既に地域で、まちづくりを目的とした芸術文化活動を実行している芸術関係者を対象に、現在進行形の取組の共有と、今後の浜通りについて語り合うことを目的として、座談会を開催した。



開催日：1/27（土）

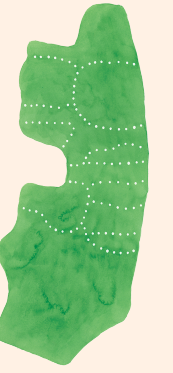
開催場所：双葉産業交流センター



座談会の実施内容

当日のタイムライン

15:00-15:05	イントロダクション
15:05-15:10	主催者挨拶
15:10-15:15	事業アドバイザー挨拶 関口 正洋（株式会社アートフロントギャラリー）
15:15-15:45	参加者自己紹介＆活動紹介
15:45-17:20	浜通りの文化芸術と暮らしの未来を語り合う
17:20-17:30	まとめ



座談会の実施内容

当日は参加者の想像を促すために、次の5つ問いを設定し、座談会を進行した。

ディスカッションの過程はグラフィックレコーディングによって記録され、参加者にリアルタイムで共有された。

Q 1

これまでの自身の映像・芸術文化を通じたまちづくりに関わる活動について、マップ上に付箋で書いてください

Q 2

活動を続けていった先に、
どんな浜通りに見えていて欲しいか？

Q 3

浜通りの地域住民 / アーティスト / 避難している人 / 地域外の人たち。
誰とどんな関係性を築いていきたいか？

Q 4

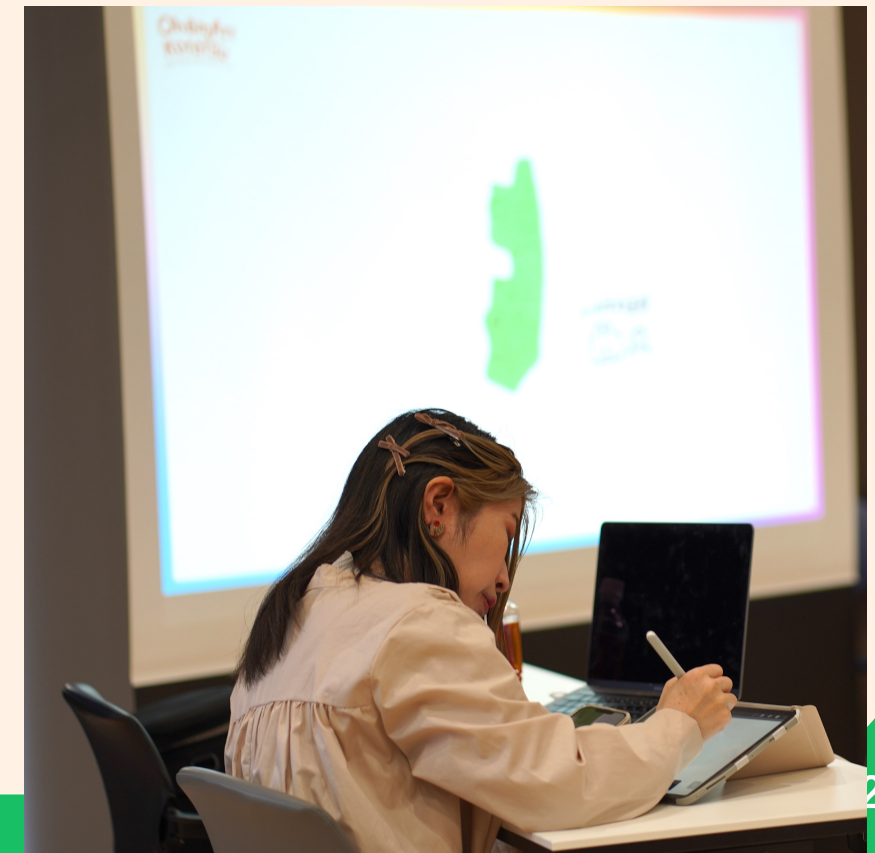
浜通りにおける映像・芸術文化活動の企画設計や広報PRをしていく上で必要なこととは？

浜通りの自然の豊かさや町の歴史・ストーリー、文化芸術をはじめとした活動を通じた人々との繋がりなどをどう活かせるか？

Q 5

浜通りにおける映像・芸術文化活動を持続していく上で必要なこととは？

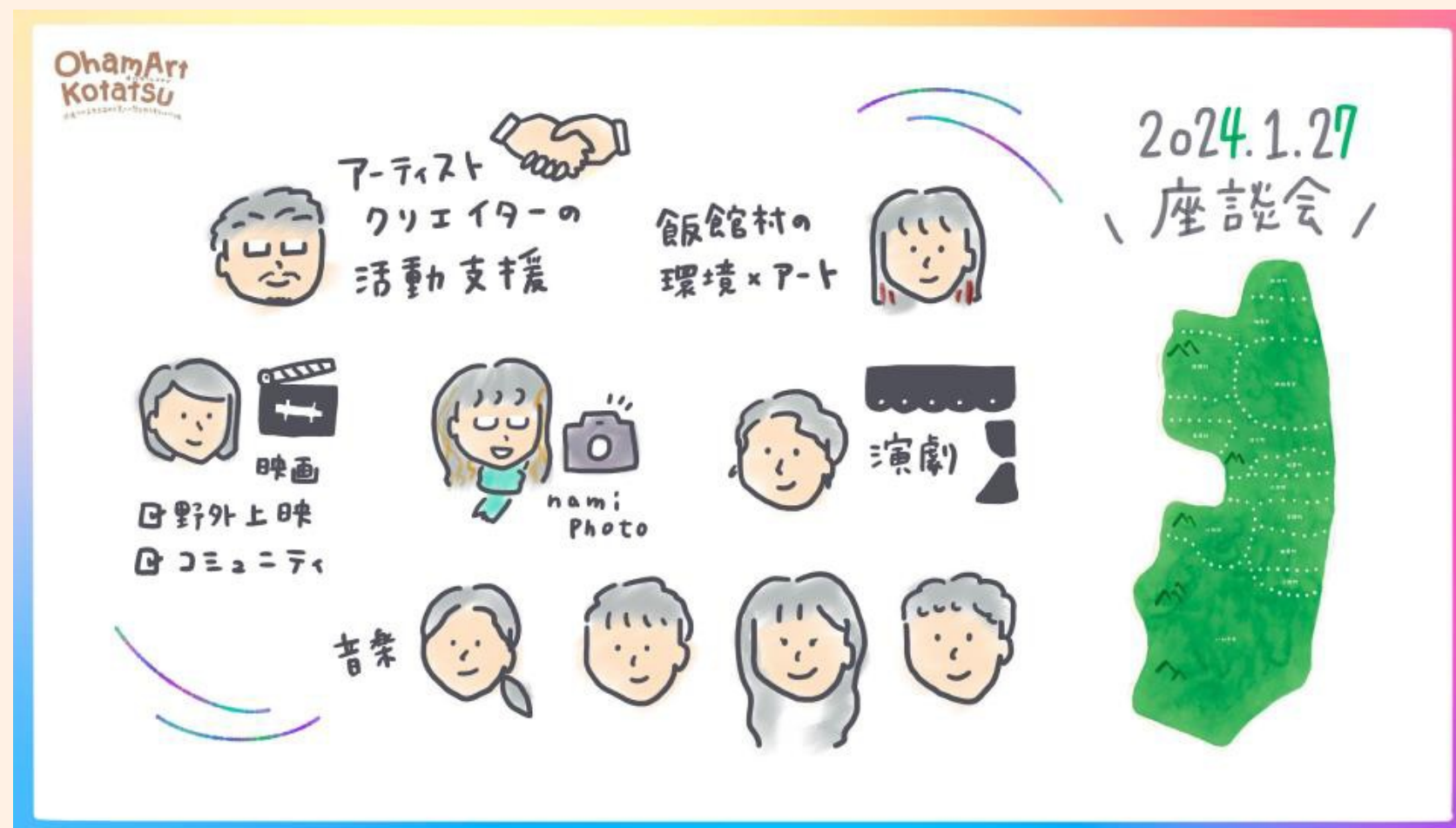
人的・資金面での持続性に必要な体制や支援とは？



座談会 ディスカッションのサマリー

Q1

これまでの自身の映像・芸術文化を通じた
まちづくりに関わる活動について、マップ
上に付箋で書いてください



座談会 ディスカッションのサマリー

Q2

活動を続けていった先に、
どんな浜通りに見えていて欲しいか？

OhamArt
Kotatsu

一度は行きたいまち

若い人だれでも
チャレンジ
リアル どうぶつのもり



アーティスト
クリエイターが
活動できる

世界最先端の
土や環境づくり



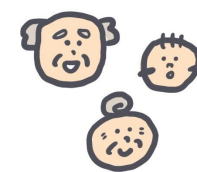
夢の
ある場所

地元には誇りをもてる

ワッワッ指教
が高い



雑草地の前書きのない
ありのまま、おもいそう!!
な地域へ

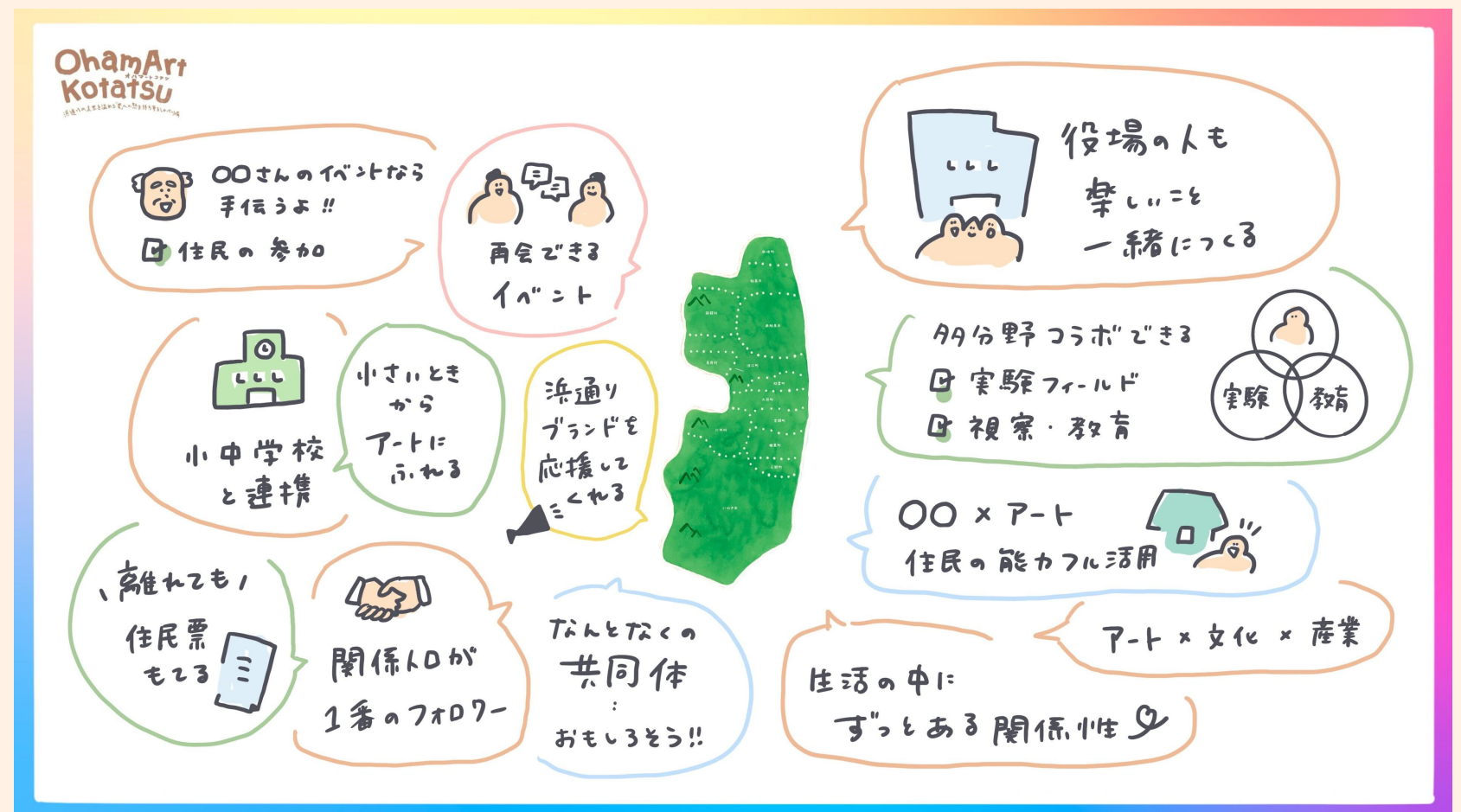


誰でもチャレンジ
できるところに
アートだけじゃない

座談会 ディスカッションのサマリー

Q3

浜通りの地域住民／アーティスト／避難している人／地域外の人たち。
誰とどんな関係性を築いていきたいか？



座談会 ディスカッションのサマリー

Q4

浜通りにおける映像・芸術文化活動の企画設計や広報PRをしていく上で必要なこととは？

浜通りの自然の豊かさや町の歴史・ストーリー、文化芸術をはじめとした活動を通じた人々との繋がりなどをどう活かせるか？

Q5

浜通りにおける映像・芸術文化活動を継続していく上で必要なこととは？

人的・資金面での持続性に必要な体制や支援とは？



編集会議の目的

芸術関係者に限らず、幅広い立場の方々と、今後の浜通りについて語り合うことを目的として、浜通り各所へのチラシの設置や、福島芸術文化推進室のnoteで広報を実施。参加者同士で、未来の浜通りについて対話を行った。



開催日：2/11（日）
開催場所：Jヴィレッジ

編集会議の実施内容

当日のタイムライン

13:00-13:05	イントロダクション
13:05-13:10	主催者挨拶
13:10-13:15	事業アドバイザー挨拶 本田 勝之助（本田屋本店）
13:15-13:35	インプットトーク① 関口 正洋（株式会社アートフロントギャラリー）
13:35-13:55	インプットトーク② 中村 恭子（特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT）
13:55-14:15	インプットトーク③ 稲村 太郎（公益財団法人セゾン文化財団）
14:15-14:35	チャレンジャーピッチ
14:35-14:45	休憩
14:45-15:40	ハマカラMAP 作成ワーク
15:40-16:00	振り返り&まとめ

編集会議の実施内容

編集会議では、参加者のインスピレーションの喚起を目的として、事業アドバイザーの関口正洋氏（株式会社アートフロントギャラリー）に加え、芸術祭運営者の中村恭子氏（NPO法人BEPPU PROJECT 代表）、文化助成財団職員の稲村太郎氏（公財セゾン文化財団）をゲストとしてお招きした。3者それぞれが、活動の方針や内容について紹介する、インプットトークが実施された。



関口正洋氏（株式会社アートフロントギャラリー）



中村恭子氏（NPO法人BEPPU PROJECT）



稲村太郎氏（公財セゾン文化財団）

編集会議の前には、ゲストに向けた、福島浜通りエリアの文化芸術プロジェクトやまちづくりを推進する拠点を巡る視察を実施。現地で芸術文化プロジェクトやまちづくりの活動に取り組む方々との、交流機会が設けられた。



編集会議の実施内容

インプットトークのサマリー

Ohama Art Festival - オハマアートフェスティバル 2月11日(日) 丁ヴィレッジ



関口 正洋さん
事業アドバイザー

最果ての地で
美術の最先端に

出会う!!

★ 地域で芸術祭

- 国内外のアーティストが参加
- あるものを足さ直す
- 地域の窓口が開かれる

★ 奥能登珠洲の特異点に迫る美術

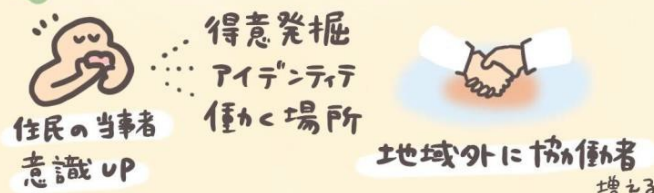


★ アーティスト×研究者のコラボ

★ 民具コレクション… 希少な保存

★ 実施に世代を超えた交流になった

- 活気が出た □ 魅力づくり
- ×メディア取り上げで活重の周知



中村恭子さん
BEPPU PROJECT

別府… 観光に支え
られているまち

昔ながらの
男性向けのプラン → new
アートを活用して
地域振興

★ 湯浴をキッカケにアートという入り口

- 若い女性や個人客を対象に
- 女性ファッション誌やSNS

★ 湯浴温泉世界



★ 誰でも参加できる発信の場

- 120企画 □ やりた人の集まり2回

★ アート運営 ★ 移住計画

若手アーティストへ 新しものづくりのモデルエリア
都屋とアトリエ □ 相談 □ 情報 □ マッチング

★ 別府からアーティストを売る場 → 生き方に会い 買ってもらう

★ 縦割りに横串を指し ★ 関係人と循環作る



稲村 太郎さん
公益財団法人セゾン文化財団
文化芸術における
中間支援の役割と可能性

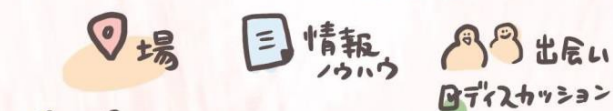
★ 活発なアートの効果の実証研究

★ ポジティブな効果

健康 学習 認知症 術の活性化

★ セゾン文化財団の基本方針

- 創造活動支援… 作いちの自由度
- 長期的視点に立った継続的な支援
- 資金のみではない複合的な支援



★ プログラム



★ 中間支援の役割



地域に
おける
共同価値
をいかに
提示するか

編集会議の実施内容

ハマカラMAP作成ワークでは、参加者は3グループに分かれ、以下4つの問いに向き合いながら、浜通りの未来について対話。グラフィックレコーディングを通じて、それぞれの参加者の思いやアイデアが視覚化、共有された。

Q1

ご自身の映像・芸術文化やまちづくりに関わる活動について、付箋で書いて共有してください

Q2

活動が続けていった先に、
どんな浜通りに見えていて欲しいですか？

Q3

インプットトークやチャレンジャーピッチを聞いて、これから浜通りにおける映像・芸術文化活動にどう関わっていきたいと思いましたか？

Q4

具体的に実現してみたいアイデアや、一緒に取り組みたい仲間・支援者のイメージがあれば教えてください



編集会議 ディスカッションのサマリー



Oha Wars Kotatsu - オハマートコタツ - 2月11日(日) デヴィレッジ

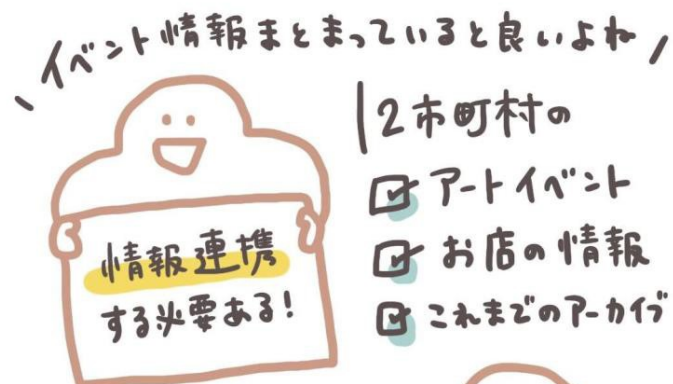
Discussion 具体的に実現してみたいアイデアや仲間のイメージ



地元の人には
当たり前な所も
じっは 魅かたくせん
演劇)の舞台として
横穴や遺跡
使えたら面白そう



とみおかウィンドメ-ズ
でイベントしたい!!



海通りの 他のエリアのプロジェクトにも参加したい!



アートが地域で暮らす人
ともつながりも増やして
いけたらいいなあ

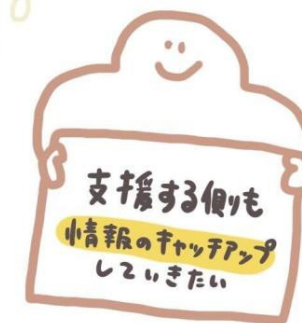


新しい活動が生まれてきている今だからこそ
地域同士ももっとつながっていきけるのでは?



地域性が強い
市町村同士も
連携できたらいいな

芸術 芸能 工芸
以外の
新しいアート活動も
まず試してみたい



3

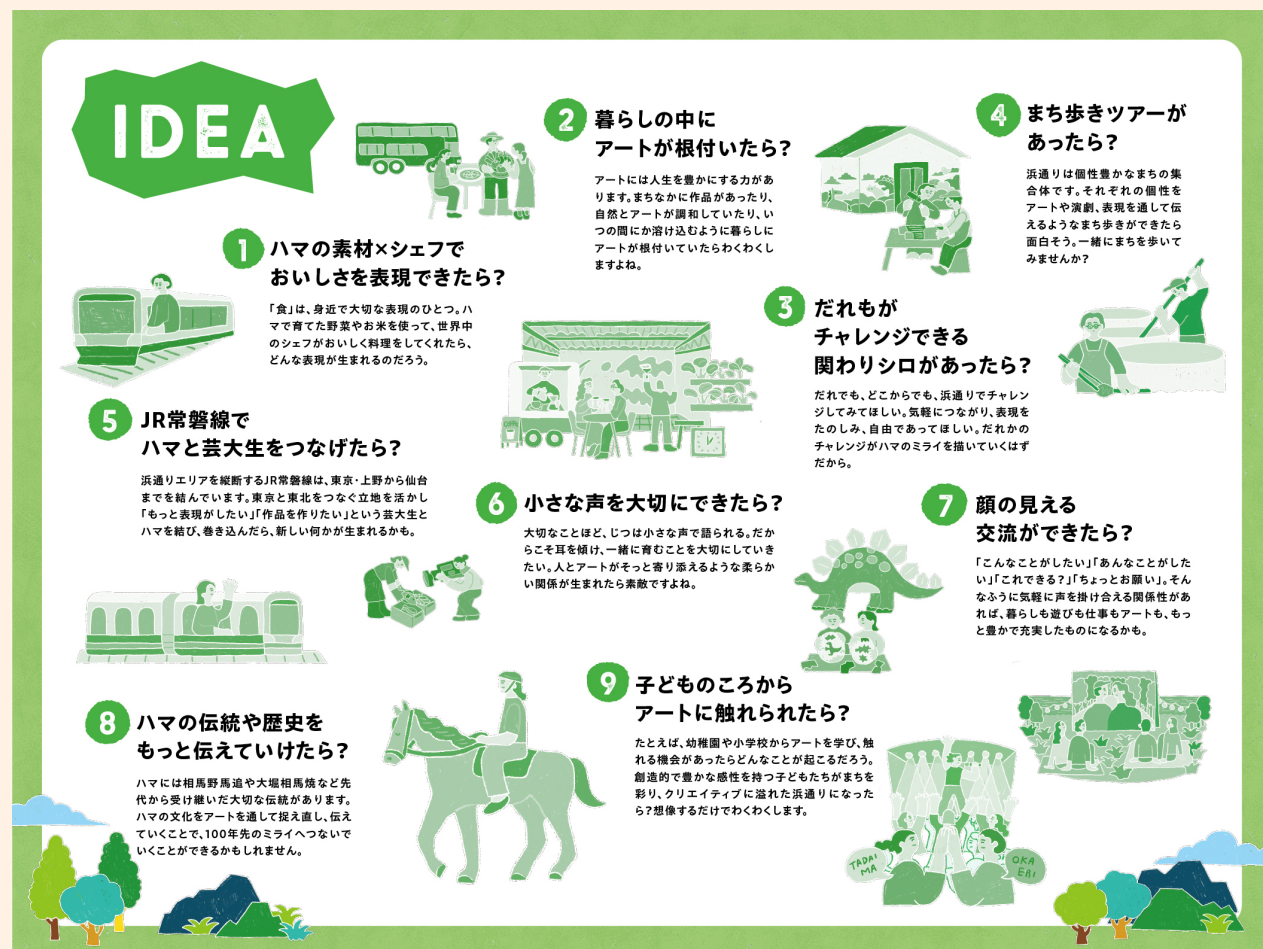


「ハマカラMAP」の制作

ハマカラMAP

今回の座談会／編集会議で行われたディスカッションの内容を踏まえて、芸術文化×まちづくりが、未来の浜通りに作り得る風景を、視覚的に表現した ハマカラMAP を作成した。

浜通りの ハマカラMAP はこれで「完成」ではなく、今回はご一緒することが叶わなかった様々な地域関係者の方々も交え、今後も芸術文化を通じたまちづくりの可能性について、対話と実践を続けていきたいという思いから、今回の対話の中で生じたアイデアを読者に対する「問いかけ」の形で表現した。



ハマカラMAP

ハマカラMAP

ハマからはじまる、創造のタネ

西におおらかな阿武隈山地、東に広大な太平洋をのぞむ浜通り。
穏やかなこの場所は東日本大震災による原子力災害で大きく傷つき、
その影響は震災から13年が経つ今でも大きな爪痕をのこしています。

一方で、浜通り各地では地域のプレイヤーが躍動し、
あたらしい文化があちこちで芽吹きはじめています。
私たちは芸術文化を通して、
より豊かな浜通りを創造していきたいと考え、
1つの指針となるようなMAPを地域の方たちと作りました。
このMAPは私たちだけが作るのではなく、
「浜通りのために何かしたい」と思うあなたと
一緒に創っていききたいのです。

IMAGE

1

わくわくが生まれる場へ

浜通りは「被災地」のイメージがまだまだ強いかもしれませんが。
一方で、ハマの各地で新しい活動のタネが芽吹いています。
その芽を育て、アートも暮らしもわくわくが生まれる
「創造の地」へと実らせていきます。

IMAGE

2

いつでも帰ってこられる

だれか“特別な人”だけがまちを創造するのではなく、
だれもが一緒にできることを育てていきます。
浜通りに住んでいる人、住んでいた人、
新しく関係が生まれた人がいつでも再会できる温かい場を目指して。

IMAGE

3

アートで地域のまなざしを開く

地域の人が思ってもみない可能性と
その先のミライを見せてくれるのがアートです。
多様な視点を持ったアーティストが
一歩外から浜通りを見て、歴史や文化を掘り起こすことで、
ハマの魅力を再発掘していきます。



ハマカラMAP

IDEA

1 ハマの素材×シェフで おいしさを表現できたら？



「食」は、身近で大切な表現のひとつ。ハマで育てた野菜やお米を使って、世界中のシェフがおいしく料理をしてくれたら、どんな表現が生まれるのだろう。

5 JR常磐線で ハマと芸大生をつなげたら？



浜通りエリアを縦断するJR常磐線は、東京・上野から仙台までを結んでいます。東京と東北をつなぐ立地を活かし「もっと表現がしたい」「作品を作りたい」という芸大生とハマを結び、巻き込んだら、新しい何かが生まれるかも。

8 ハマの伝統や歴史を もっと伝えていけたら？

ハマには相馬野馬追や大堀相馬焼など先代から受け継いだ大切な伝統があります。ハマの文化をアートを通して捉え直し、伝えていくことで、100年先のミライへつないでいくことができるかもしれません。



2 暮らしの中に アートが根付いたら？

アートには人生を豊かにする力があります。まちなかに作品があったり、自然とアートが調和していたり、いつの間にか溶け込むように暮らしにアートが根付いていたらわくわくしますよね。



6 小さな声を大切にできたら？

大切なことほど、じつは小さな声で語られる。だからこそ耳を傾け、一緒に育むことを大切にしていきたい。人とアートがそっと寄り添えるような柔らかな関係が生まれたら素敵ですよ。



9 子どものころから アートに触れられたら？

たとえば、幼稚園や小学校からアートを学び、触れる機会があったらどんなことが起こるだろう。創造的で豊かな感性を持つ子どもたちがまちを彩り、クリエイティブに溢れた浜通りになったら？想像するだけでわくわくします。



4 まち歩きツアーが あったら？

浜通りは個性豊かなまちの集合体です。それぞれの個性をアートや演劇、表現を通して伝えるようなまち歩きができたら面白そう。一緒にまちを歩いてみませんか？



3 だれもが チャレンジできる 関わりシロがあったら？

だれでも、どこからでも、浜通りでチャレンジしてみたい。気軽につながり、表現をたのしみ、自由であってほしい。だれかのチャレンジがハマのミライを描いていくはずだから。



7 顔の見える 交流ができたら？

「こんなことがしたい」「あんなことがしたい」「これできる？」「ちょっとお願い」。そんなふうに気軽に声を掛け合える関係性があれば、暮らしも遊びも仕事もアートも、もっと豊かで充実したものになるかも。





事業アドバイザーからのコメント

浜通りで活躍している芸術文化関係者のみなさまは、各々に考えを持って、独自性を持った活動をしています。これらの活動を最大公約数としてまとめてしまうと、どうしてもありきたりのものになってしまうと考えました。そこで、今回のハマカラMAPは、それぞれの活動がどのようにつながっていったらいいか、浜通り全体としての方向性が生まれうるのかを想像してみる、第一フェーズのビジョンとして、作成してきました。

いくつかのフェーズごとに目標を定めながら、ボトムアップではじまったさまざまな活動を、浜通り全体の芸術文化振興として発展させていくためには、どんなことが必要なのかを話し合いながら、具体的なアクションとして求められていることが多く顕在化されてきましたが、まずは、実行を支える体制面の強化が求められていると感じました。さまざまなイベントなどの日程や情報がまとめて発信され、地域の外から来てくれる人にも共有されている状態を整備することが、第一フェーズのやるべきこととして見えてきました。

芸術文化に関心を持って浜通りを訪れてくれる人にとって大事になってくるのは、芸術関係のイベントだけではなく、お昼ご飯を食べるお店の情報であったり、一休みするカフェの情報であったりと、多岐にわたります。こうした情報を来訪者視点で魅力を感じてもらえるようにまとめて発信していくことから始めて、浜通り地域の芸術祭開催など、次のフェーズに向けた準備を進めていければと思っています。

事業アドバイザー

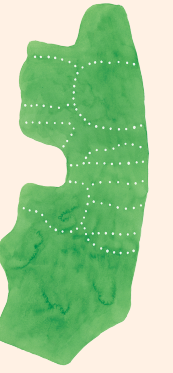
本田 勝之助



4

事例調査の概要





事例調査の目的

- ・福島県浜通り地域に応用できる国内外の事例調査を行い、浜通りのまちづくりに関する地域活動をより活性化させていくためのノウハウやヒントを得ること
- ・調査結果を浜通りのまちづくりに関わる方や映像・芸術文化でのまちづくりに取り組む方たちと共有し、対話をする中での参考材料としながら、福島浜通りの未来の姿を共に描くこと

事例調査の目標

- ・映像・芸術文化を通じたまちづくりに関する事例調査・有識者へのヒアリングから成功要因・失敗要因に関する知見を得ること
- ・福島浜通り地域においても応用の可能性が高い映像・芸術文化によるまちづくりの事例を10件程度選定し、調査を行うこと
- ・ヒアリングにあたっては、事例調査も踏まえつつ、映像・芸術文化によるまちづくりに関して実践・研究を行ってきた国内外の有識者に対する対面又はオンラインのヒアリングを実施すること



調査方法

● 事例調査 - デスクトップリサーチ -

デスクトップリサーチを実施し、下記の項目に関する情報を60事例分収集した。収集した事例リストには経済産業省や福島芸術文化推進室のメンバーが関わる取り組みを加え、評価項目に沿ってインタビュー対象となる事例を選定した。評価項目については、次頁で説明する。

調査項目

- ・ 都道府県
- ・ 市町村名
- ・ 市町村人口
- ・ 事例名
- ・ 実施概要
- ・ 主要団体
- ・ 外部パートナー
- ・ 実施期間
- ・ 中心コンテンツのカテゴリ
 - ・ 映画/映像
 - ・ 舞台芸術
 - ・ 音楽
 - ・ 美術/AIR
 - ・ メディア・アート
 - ・ 場作り
 - ・ ものづくり
 - ・ 複合型
- ・ 成果（定量/定性）

- ・ 経済効果のカテゴリ
 - ・ 非経済的效果
 - ・ 経済的效果
- ・ 浜通りとの共通項
- ・ 発足した背景情報

● 実施手順

1. 映像・芸術文化での地域振興に取り組む活動について、検索サイトを通じて事例をリストアップ

2. 調査項目の内容について、事例の公式Webサイトの他、インタビュー記事などを参照し情報を収集

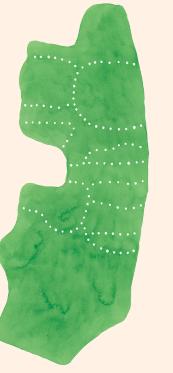
3. 経済産業省や福島芸術文化推進室のメンバーが関わりのある事例について、事例リストに追記

調査結果の編纂について

本調査では、福島浜通りエリアにて活動に取り組む地域関係者の方々が、今後自らの活動をデザインしていく際の参考材料となりうる情報を収集するために、国内7・海外3の映像・芸術祭が取り組んできた成功のための工夫を、限られたインタビュー時間の中で、なるべく網羅的に聞き取ることに主眼をおいた。

本報告書では、読者が、インタビューにご協力いただいた10の事例の概要や、それぞれが活動の持続と発展のために行ってきた「文化芸術×まちづくり 成功のための工夫」の一部を気軽に垣間見られるリファレンスとなることを目指し、インタビューの解答から一部を抽出し「事例毎の工夫概要」と「共通の問いに対する、事例毎の回答抜粋集」として編纂した。

それぞれの運営者たちが、どのようなことを重視してきたのかを参照することで、読者が、活動に取り組む際の参考にしたい事例を探し、自ら深掘りを始める、きっかけとなれば幸いである。



5



調査対象事例の選定基準



インタビュー調査対象選定のために

● 優先順位づけのための項目設定

設定の背景

福島県浜通り地区の活動にとってなるべく応用可能性が高そうな先行事例を、インタビュー調査の対象として選定するため、事前に右記の項目を設定し、デスクトップリサーチを行い、これを選定の参考材料とした。

「地域性を活かした取り組み」という項目は、全国・世界各地で開催される数多くの文化・芸術プロジェクトに当てはまる項目であると同時に、地域の独自性が色濃く現れるものでもある。そのため地域性以外には、浜通り地区との類似性を念頭におきながら、成果・変化の内容や、成長・発展の方向性、継続性を項目として設定した。また、直接の選定理由とはしていないものの、プロジェクトの中心コンテンツが現在の取り組みと近い事例となるよう、分類を行った。

デスクトップリサーチでは公式ウェブサイトの記述や、公表されている場合には事業報告書や関連するオンラインニュース、インタビュー記事を参照し、5項目の内容を調査した。

● 設定した項目

1. 地域性を活かした取り組みか

地域性を芸術祭やプロジェクトの中心テーマに追いついているか、地域の産業・資源を活かした取り組みかを項目として設定することで、コンテンツそのものの市場価値や知名度によらない、事例を絞り込むために設定。

2. 浜通りと類似する点があるか

福島県浜通り地区との類似点として、自然災害等の被災経験有無とその復興・再生事業であるか、産業・観光・文化芸術振興としての事業であるか、地域活性化の施策事業であるかを念頭に項目を設定。

3. 効果的な成果・変化を出せているか

文化・芸術が人々の心を豊かにするという前提から、地域住民の行動変容やシビックプライド等の文化的（非経済的）成果の有無や、新規事業創出や経済循環への寄与など経済的効果の有無を項目として設定。両側面での成果が考えられるものを選定。

4. 取り組みが成長・発展しているか

取り組みが成長・発展するためには、運営主体の体制の他に、住民や行政、民間企業との協働・連携、資金繰りに向けた施策も必要となる。持続可能な活動となるための施策を講じている事例を対象とするため、項目として設定。

5. 取り組みが3年以上継続しているか

取り組みの成長・発展を検討するもう1つの側面として、現在も開催されていて3年以上（開催3回以上）の取り組みであるという項目を設定。「3回目」とした理由は、初年度・次年度の経験を踏まえて、ある程度事業のフレームワークが整う時期であると推測したため。

インタビュー調査対象事例と選定理由

● L'Aquila Film Festival (LAQFF)

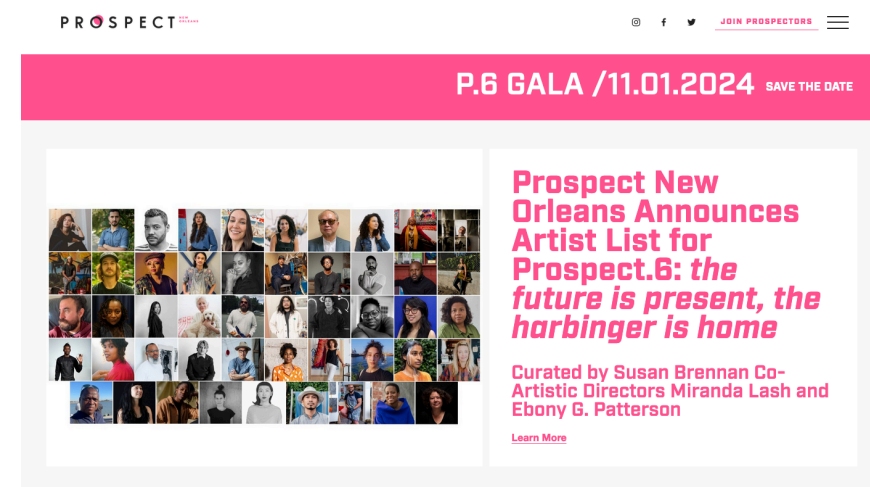


イタリア、アブルッツォ州の首都ラクイラにて、毎年4～11月に開催されている、映像芸術祭。春・夏の会期中、街中だけでなく、近隣のグランサッソディタリア山地でも無料上映やトークイベントなどの活動が行われる。ヨーロッパのディレクターの短編や長編映画も受け入れ、移住や環境課題など、テーマ毎の賞も存在する。

選定理由

芸術祭の発足から2年間後の2009年、ラクイラ近くにて、マグニチュード5.8の地震が発生し、被害を受けた。その後、ラクイラを芸術・文化で復興したいと考えた市民の活動によって、ラクイラ映像芸術祭は、復興の柱の一つになっている。今でも市民が「新しいラクイラを作る活動」と意識しながらまちづくりのために協力しているため。

● Prospect New Orleans



アメリカ、ルイジアナ州のニューオーリンズにおいて、3年に一度開催されている現代美術祭。毎回新しいアーティストディレクターを迎え、世界中から数十人のアーティストが展示を行う。テーマは変えつつも、ニューオーリンズの文化多様性と環境との関係が常に重要視されている。街中の公共空間の復興と、多様な文化的な遺産のセレブレーションを目的とした彫像プロジェクトも実施している。

選定理由

ハリケーンの被害を経たエリアにて、「芸術に何ができるか」が問われながら継続されてきた芸術祭。自然災害での災禍を経て開催される芸術プロジェクトとしての意識や、地元の受け入れ状況（賛成・反対両方）について、アプローチの方法や姿勢を聞くことができる可能性を踏まえた。



インタビュー調査対象事例と選定理由

● PASSAGES INSOLITES



PASSAGES INSOLITESは、2014年にケベック州で始まったパブリックアート・フェスティバル。2015年6月に第1回が開催され、地元および国際的なアーティストによる静的・動的な作品やパフォーマンスを通じて、公共空間の新しい体験方法を提供している。社会問題を浮き彫りにし、住民や観光客がアートを通じて都市とつながるきっかけを作り、住民参加型の取り組みにより、アートとのつながりを深めることを目指している。

選定理由

メインの開催地であるケベック市以外の都市にも巡回するプロジェクト。プロジェクトが、参加アーティストのPRの機会にもなるよう、設計されている。市と民間団体が協働して実施している一例として、価値観や文化の違いを踏まえた取り組みの姿勢や、ステークホルダー同士での役割分担などのあり方を、参考にできるのではないかと考えたため。

● 大地の芸術祭



1994年に、アートにより地域の魅力を引き出し、交流人口の拡大等を図る10カ年計画「越後妻有アートネックレス整備構想」の1つとして企画され、2000年に第一回を開催した世界最大級の国際芸術祭。アートを道しるべに里山を巡る新しい旅は、アートによる地域づくりの先進事例として、国内外から注目を集めており、農業を通して大地とかわって来た「里山」の暮らしが今も豊かに残っている地域で、1年を通して自然の中に作品を展示している。

選定理由

行政による地域振興施策の1つとして始まった芸術祭として、長期の実績をもつ事例である。行政施策を契機とした事業がどのように展開・継続してきたかは、芸術祭やアートプロジェクトが実施される自治体にとって有益な情報となると考えた。また、芸術祭開始の数年後に被災経験もあり、芸術祭としての対応や取り組みは多くの活動にとって参考になると考えた。

インタビュー調査対象事例と選定理由

● みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ



東北芸術工科大学が主催するビエンナーレ。市内の複数会場を拠点に毎年テーマを設定し、アート、音楽、詩、ファッションなど、複数の領域でのプログラムを展開している。東日本大震災の復興支援活動を経て、当時の学長が「東北と芸術を冠する大学がこれからの地域に対して何ができるか」と投げかけたことが、これまで継続的に展開してきた「周辺地域全体を屋根のない美術館にする」という「美術館大学構想」の諸活動の成果と重なり、そのコンセプトの具現化に繋がった。

選定理由

震災を契機とした芸術祭であり、公設民営の芸術大学が主体となっている点で独自性がある。また、自治体や民間団体ではなく、教育機関が中心となる芸術祭は、今後浜通りの各地に人々が戻り、地域に子どもや学生が増える可能性を見据えた時、芸術を通じた地域と教育機関の連携の例として、参考になる点が多いのではないかと考えたため。

● アウトクロップ



社名である「アウトクロップ」は、日の目を見ない価値を掘り起こすことを意味する。ビジュアルストーリーテリング（映像によって物語を伝えること）を軸に、地域社会で目を向けるべき事柄に、アートやシネマなど独自の文脈を使って、対話や考えるきっかけを生み出している。秋田中央通りに建つ明治の古民家を改装してつくられた「アウトクロップ シネマ」では、映像をただ見るだけではなく、観賞後の対談、フード、ドリンク、イベントなどを併せて提供している。

選定理由

映像制作を事業として展開していく中で、企業ブランディングやシティプロモーションとともに、地域にある魅力的な資源や人の活動に焦点を当てることで地域住民のシビックプライドの醸成に寄与していること。また、アウトクロップシネマの運営を通じて、対話が生まれる場を提供し、地域住民にとっての気づきやコミュニティとしてのつながりを生み出していること。これらの点が活動の経済的な効果を超えた社会関係資本の構築などの点でもユニークな活動となっている。



インタビュー調査対象事例と選定理由

● なら国際映画祭



河瀬直美監督がエグゼクティブディレクターを務め、奈良市で2010年より隔年開催されている国際映画祭。若手の映画作家の制作・発表機会となることを目指し、「NARActiveプロジェクト」と共に開催されていることが大きな特徴である。映画館のない街での映画文化振興として、若手映画人の制作プロジェクトの他にも、移動上映会こども向けのアウトリーチ活動など、多様な活動も並行して開催されている。

選定理由

若手の映画制作と映画祭を通して、奈良で映画文化を振興していきたいという河瀬氏の考えに賛同し、民間の有志メンバーによって運営基盤が築かれた。14年にわたる継続開催の中で、民間の運営主体が行政等とどのように関係を作ってきたかという点で、参照可能な点があると考えたため。

● 下町芸術祭



神戸市長田区を舞台に2年に1度開催されている芸術祭。阪神淡路大震災から20年経った2015年に、地域の商店主や建築家、アーティスト、NPOが集まって実行委員会を組織。第1回が開催された。地域の今現在の魅力をアーティストの独自の視点や作品を通して、地域住民や来街者に対して提示することを目的としている。開催にあたっては、新長田を拠点とする「文化芸術」「まちづくり」「多文化共生」に取り組む諸団体と広く連携している。

選定理由

阪神淡路大震災の被災地域としては被害の大きかった地区でありながら、芸術祭としては「震災」や「復興」というキーワードを使うことなく開催されてきている。地元出身者ではなく、移住者が運営主体となっており、地域との関係づくりや土地の活かし方という観点で浜通りの活動でも参照可能な点があると考えたため。



インタビュー調査対象事例と選定理由

● BEPPU PROJECT

BEPPU PROJECT

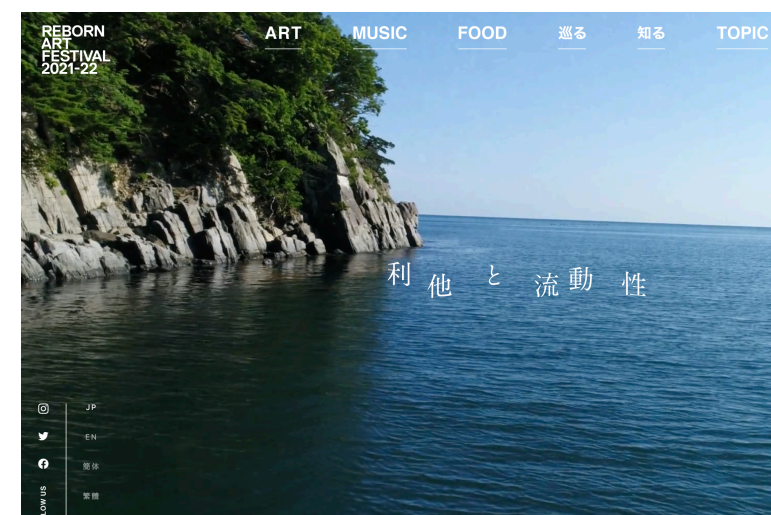
WE CREATE NEW ART SYSTEM IN THIS LOCAL SITE.

BEPPU PROJECT は、世界有数の温泉地として知られる大分県別府市を活動拠点とするアートNPO。2005年4月に発足して以来、現代芸術の紹介や普及、フェスティバルの開催や地域性を活かした企画の立案、人材育成、地域情報の発信や商品開発、ハード整備など、さまざまな事業を通じてアートが持つ可能性の普遍化を目指し、アートを活用した魅力ある地域づくりに取り組んでいる。

選定理由

別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」の開催をはじめ、さまざまな分野でアートと地域をつなぎ、誰もが自由に創造性を発揮できる土壌をつくることに貢献している。設立以来20年近いアートNPOとしての活動実績があり、文化芸術振興事業にとどまらず、移住・定住促進事業、福祉・障害者芸術事業、観光振興・情報発信事業、製品のブランディング・6次化事業など幅広い事業展開をしていることが、活動の持続可能性の点で参考となるため。

● Reborn-Art Festival



東日本大震災の復興支援を機に構想され、2017年に本祭がスタート。およそ2年に一度開催。宮城県の石巻市を主な舞台とした、「アート」「音楽」「食」の総合芸術祭。東日本大震災の被災地で、「Reborn-Art = 人が生きる術」をキーワードに掲げ、2015年に実行委員会を設立。3回目の開催は、震災から10年という節目に、コロナ禍を見据え、2期に分けて実施。「利他と流動性」をテーマに、2021年夏〔前期〕と2022年夏〔後期〕に開催。

選定理由

復興支援のボランティア活動を背景に、（一社）ap bankと石巻市を中心に実行委員会を発足。石巻市と周辺の自治体などから委員会構成メンバーが集い、発足当初から地域内外と官民の連携で運営されてきた。また、地元住民との対話を通じ、一時的な経済効果ではなく、地元の人にとって地域が震災前よりも魅力的になることが目指されてきた。地元との対話のプロセスや、エリア内・外や自治体間の連携の努力は、浜通りエリアにとっても参考になると考えたため。



インタビュー調査のヒアリング項目

1事例につき、90分程度のインタビュー調査を実施。福島浜通りの映像・芸術文化×まちづくり活動の今後の発展のために、向き合うべき課題や解決方法、まちとのコミュニケーションのあり方、活動の成果やまちの変化等について、ヒントとなる情報やノウハウを得ることを目的とし、実施にあたっては、以下のような網羅的な質問項目を設定した。

基本情報

- 活動開始の背景や思い
- 初期のコンセプトや目的
- 地域に見受けられた課題

地域コミュニティとの連携

活動を始める際、どのように地域コミュニティと連携し、関係性を築いていったのでしょうか？

- 協力や理解を得る過程にあった課題
- 良い関係性の構築に繋がった出来事
- 地域の方々の参加がどのように促進されてきたか

地域コミュニティとの連携

地域の文化資源や歴史と活動との接続について、どのような方針をもって活動されていますか？

- 地域特有の文化や歴史を、活動にどのように取り入れてきたか
- 地域の文化資源はプロジェクトにどんな価値をもたらしていると思うか
- 地域の産業や資源（ヒト・モノ・コト）をどのように活かしているか
- 地域内外の企業との、テーマに関係する連携例

活動が持続・成長する仕組み（運営体制・広報・資金繰り）

活動の持続や発展のために、運営体制・広報・資金繰りにおいて、工夫していることは何ですか？

- 活動の継続年数と変遷のターニングポイントについて
- 行政、民間企業・団体、市民の、ステークホルダーとしての関り方
- 体制変更の経験有無と、変更前後の変化について
- 運営体制づくりにおける工夫や課題
- 地域内外との、持続可能な関係性構築のための戦略
- 活動の文化的（非経済的）成果と経済的成果について
- 創出作品・体験のアーカイブ化の取り組みの有無、権利の扱いについて
- 広報のための工夫や課題
- 資金繰りのための工夫や課題

文化芸術（アート・映像）と地域振興におけるアートの位置付け

アーティストの選び方や、アート作品の見せ方などを、どのようなスタンスや方針で行っているのでしょうか？

- 文化芸術とまちづくり、の接続のための工夫

今後の展望

今後の活動ビジョンや、福島浜通りで活動されている方々へ伝えたいことはありますか？

- 広く映像・芸術文化×街づくりで意識・実践すべきこと
- 今後、特に重点を置きたいと考えている点



事例別

文化芸術×まちづくり 成功のための工夫





文化芸術×まちづくり 成功のための工夫

● L'Aquila Film Festival

インタビュー

Federico Vittorini
(フェデリコ・ヴィットリーニ)

L'Aquila Film Festival
アーティスティックディレクター

ラクイラ短編映像芸術祭（コルトラクイラ）を2003より開始し、2007年にラクイラフィルムフェスティバル改称。熱心な映画ファンと市民としてラクイラ住民達と綿密に協力。



成功のための工夫

1. 住民の意見を取り入れ、新しいアイデアを育む土壌がある

ラクイラは震災前から結束の固いコミュニティであった。そのためLAQFFは住民のアイデアを常に受け入れ、積極的に意見を求めることを大切にしている。双方向のコミュニケーションを通じて新たな事業が生まれ、既存の強いつながりを基盤に住民の主体的な参加を促すことで、革新的な取り組みを生み出す土壌が形成されている。

2. 歴史的建造物の再利用と山岳の魅力を融合

新しいラクイラの姿に注目が集まる中、LAQFFは歴史的建造物のリノベーションと活用に力を入れている。また、街の外に広がるグラン・サッソの山々の魅力にも焦点を当てている。古い建物に新しい命を吹き込み、豊かな自然を前面に押し出すことで、過去と現在、都市と自然が調和した街づくりを目指し、伝統を大切にしつつ地域の多様な魅力を生かす取り組みを行っている。

3. 広報体制を地元の力で補完し、内外に働きかける

震災の影響で常勤スタッフが4-6人と少ない中、LAQFFは地域外への情報発信と地域内の支援を両立させている。外部に向けては他の映画祭に出向き上映を呼びかけるなど、できる範囲で広報活動を行う。一方で、地元大学生やジャーナリストにボランティアを仰ぎ、地域住民の提案を幅広く取り入れることで、口コミと地元ファンの力を最大限に活用している。

4. 公的支援と民間の創意工夫を組み合わせる

LAQFFは、公的資金を活用しつつ、民間の創意工夫を取り入れることで、地域に根差した映画祭として発展を続けている。地震からの復興過程で、町の人々と強い絆を築き、彼らの協力を得ながら、少人数の常勤スタッフで効率的な運営を実現している。無料の上映会などを開催し、より多くの人々を惹きつけることで、ラクイラ市の文化的な魅力を高めている。行政と民間のバランスの取れた関係が、LAQFFの成功の鍵となっている。

5. ボランティアの企画提案を取り入れ、共に作り上げる

LAQFFでは、住民からのボランティア参加を歓迎し、一緒にイベントを作り上げることを大切にしている。最近アフリカから移住してきた人々によるトークイベントや、美術館での映画鑑賞プログラムなど、住民発案の企画が多数実現している。こうした多様な取り組みを住民と共に作り上げることで、よりよいイベントを生み出すと同時に、コミュニティの一体感を醸成している。

6. 地元密着型の活動で、住民との結びつきを深める

LAQFFは常設の会場がない中、住民の集会所などで定期的に上映会を開き、地域に根ざした活動を続けている。また、1週間だけでなく年間を通して地域の様々な場所で催しを行っている。住民と一体となって祭りを作り上げることで、文化的・社会的な成長と、コミュニティの絆の強化につなげている。こうした地元密着型の活動を通じ、地域との結びつきを大切にしている。



文化芸術×まちづくり 成功のための工夫

● Prospect New Orleans

インタビュー

Nick Stillman

(ニック・スティルマン)

Prospect New Orleans
エグゼクティブディレクター

ニューオーリンズ大学で現代技術歴史の教授、「BOMBマガジン」の編集局長、アーツカウンシルニューオーリンズ会長兼代表を歴任。現代アート業界の知見と財務や経理の専門知識を有することから、2018年3月にエグゼクティブディレクターに着任。



成功のための工夫

1. 地域のアートシーンを理解し、戦略的にアウトリーチ

地域のアートシーンを深く理解することで、観客にリーチするための糸口が見えてくる。限られた資源を最大限に活用するためにも、アウトリーチ活動は戦略的に行うことが重要である。地域の特性や関心事を把握し、それに合わせたアプローチを取ることで、効果的な観客開拓が可能となる。

2. 街と町民を優先し、地域社会に貢献

地元アーティストの作品を公共スペースに展示し、音楽家などの地元プレーヤーをイベントに招待することで、地域社会との結びつきを強化する。街と町民を優先し、彼らの創造性や才能を活かすことが、文化芸術によるまちづくりの鍵となる。地域の人々が主体的に参加できる機会を創出し、彼らとの協働を通じて、地域社会に貢献していくことが求められる。

3. 適切な人員配置とバランスの取れたチーム編成

様々な業務をこなせる有能なチームの編成が不可欠である。エグゼクティブに過度な負担がかからないよう、またアーティストにも配慮しながら、バランスの取れた人員配置を行うことが重要である。各メンバーの強みを活かし、互いに補完し合える関係性を構築することが、プロジェクトの成功に繋がる。適材適所の配置と、明確な役割分担が鍵となる。

6. 財務の安定化とセーフティーネットの確保

助成金、チケット制イベント、美術品販売が収入の大半を占めるが、それだけでは不十分な場合もある。信用枠を確保することで、厳しい状況下でもチームのストレスを軽減し、財務の安定化を図ることができる。また、収入源の多様化を図ることも重要である。寄付や協賛など、新たな資金調達の方法を模索し、財務基盤を強化していくことが求められる。

5. 地域の多様性を反映し、課題に取り組む

世界中から集まるアーティストの作品を展示することで、地域の多様性を反映する。住民は自らの経験や問題を振り返る機会を得ることができ、地域の課題に向き合うきっかけとなる。異なる背景や視点を持つアーティストとの交流を通じて、新たな気づきや発見がもたらされる。地域の多様性を尊重し、それを強みとして活かしながら、課題解決に取り組むことが重要である。

6. 地元第一の姿勢で、継続的な活動を

年間を通したプログラムを実施することで、注目を集め、安定した収入を得ることができる。地元の関係者や専門家とのネットワークを広げ、地域社会に貢献し続けることで、信頼性が高まり、持続可能な活動につながる。一過性のイベントではなく、地域に根差した継続的な活動を行うことが重要である。長期的な視点を持ち、地域との関係性を深めながら、文化芸術を通じたまちづくりを進めていくことが求められる。



文化芸術×まちづくり 成功のための工夫

● PASSAGES INSOLITES

インタビュー

Vincent Roy

(ヴァンサン・ロイ)

EXMURO

アーティスティック・クリエイティブ共取締役

元々写真家、公開空間にあるアートの力を気付き、EXMUROを設立。ケベック市の旧市街の進行事業として、自治体と一緒にPASSAGES INSOLITESを2014年から主催。



成功のための工夫

1. 住民との対話と参加で当事者意識を醸成

住民との対話と参加で当事者意識を醸成 芸術祭の設営から撤去まで、住民が自由に意見を交わせる機会を設ける。アートトランスレーターを配置し、来場者との対話を促進することで、芸術祭への当事者意識を高める。住民参加型のキュレーションにも取り組み、アートへの理解と関心を深める。

2. 場所の歴史と特色を反映したアート展示

場所の特性を生かしたアート展示 ケベック市の歴史地区を舞台に、場所の特性を生かしたインスタレーションを創出する。例えば、潮の干満で水位が変化する水路に設置されたアイ・ウェイウェイの「ライフジャケット」は、場所の特徴を活かした作品である。

3. 多様な収入源とグローバルネットワークの構築

事業の持続性を高めるため、公的資金だけでなく、チケット販売やグッズ、カフェ事業など、多様な収入源を確保する。また、アート循環プログラムを通じて、世界中の芸術祭とのネットワークを築き、グローバルな視点で事業を展開することで、新たな機会を創出する。

4. アートを通じた新たな体験と交流の場

パブリックアートがもたらす新たな体験と気づき パブリックアートは、観光客から地元ボランティアまで、あらゆる人々に公共空間での新鮮な体験をもたらす。芸術祭では、ジェンダー不平等や移民問題など、地域や世界の課題に取り組む作品も展示される。こうした作品との出会いを通じて、来場者は新たな視点を得ると同時に、社会問題についての理解を深める機会を得ることができる。

5. 住民参加で芽生える当事者意識とアンバサダー効果

展示の設営や撤去に参加することで、住民はポジティブな感情を抱き、芸術祭への当事者意識が芽生える。この体験を通じて、住民は芸術祭の魅力や価値を実感し、その想いを家族や友人に伝えることで、芸術祭のアンバサダーとなる。こうした住民発信の情報発信は、芸術祭の認知度向上とプロモーションに大きく貢献する。

6. 持続可能性とコミュニティとの共生を目指して

環境に配慮した持続可能な素材を使用し、ジェンダー平等や移民問題など、社会的に重要なテーマを扱うアートを積極的に取り入れる。芸術祭の規模や形式にとらわれず、コミュニティとともに柔軟に活動を展開していく。時代の変化に合わせて事業内容を見直し、発展的に変化していくことを恐れない姿勢が求められる。



文化芸術×まちづくり 成功のための工夫

● 大地の芸術祭

インタビュー

齋喜 直
(サイキ タダシ)

大地の芸術祭実行委員会 事務局長
十日町市役所産業観光部文化観光課 課長

2002年ごろから合併を前提とした合併を前提とした6市町村で構成される十日町地域広域事務組合の職員として大地の芸術祭に携わる。全庁的に芸術祭に取り組む市役所職員として、課の異動を経験しながらも継続的に事業に携わり、2023年4月より現職。



成功のための工夫

1. 説明会を重ねて信頼を獲得

「アートによる地域活性化」について、複数自治体の首長・議会・住民の理解を得るため、総合ディレクターの北川フラム氏自らが熱意を持って説明会を重ねることで信頼関係を築いていった。また、第1回で地域の外から参加したアート系の学生を中心としたボランティアの存在は、若い人が地域にやってくることで、そして「芸術祭がアートを介して地域の価値を見せていること」の理解が広まるきっかけとなった。

2. 市町村合併を前提にした広域地域連携が基盤に

新潟県内でも高齢化・過疎化が進む地域で、「越後妻有アートネックレス整備構想」が始まった。芸術祭の他にも、地域資源の再発見、場の接続、地域の魅力発信のための交流拠点確立への取り組みがあり、交流人口を増やすこと、そうした取り組みを通して広域地域の人たちが、地域の魅力をもう一度自分たちで再認識をして楽しんでもらう、集落を元気にする活動が基盤となった。

3. 担当部局の職員だけでなく全庁的に芸術祭に取り組む

実行委員会では、芸術祭を経験した職員を少しずつ入れ替えてナレッジの継承に努めている十日町市役所全体で部局の枠を超え全庁的に取り組むと同時に、交流人口増加を芸術祭の目標の1つとしていることから、観光協会との連携も実施。2008年からは作品の管理や恒久施設での企画を担うNPO法人越後妻有里山協働機構が立ち上がり、連携と役割分担をしながら事業を進行している。

4. 複数財源の確保とターゲットに合わせた広報

芸術祭実行委員会予算は、自治体からの1億2千万円とパスポート売り上げ／寄付・協賛／国からの助成金が資金源。パスポートの収益はここ2年ほど安定しているが、変動に備えて企業からの協賛や助成金も獲得している。実行委員会予算とは別に単独予算を持ち、恒久作品や施設への投資に充てている。広報では、実行委員会が主に県内への広報・ローカル紙へのアプローチを担当。取材が入る時には、広報の媒体や取材される内容によって実行委員会／NPOのどちらが受けるか、インタビューを誰にするかを調整している。

5. 地域へのヒアリングと企業の地域課題との連携

トリエンナーレの開催ごとに各集落へアンケートを実施し、その回答をもとに説明会とより詳細なヒアリングを実施。その内容をディレクターやアーティストと共有し、地域と共に芸術祭を制作している。また、企業が持つ地域での課題に対してアートでの課題解決実施にも取り組んでいる。作品の権利所有は主に実行委員会だが、修繕の可否やメンテナンス方法についてはアーティストと連絡をとりながら進めている。

6. 進化を続けながら、対話を重ねる

常に進化を続け、より幅広い層に芸術祭を知ってもらえるように、地域の1つの財産だと住民に感じてもらうよう取り組んでいきたい。芸術祭を通して隣接する地域、またその先にある思想、地域、住民、生活文化に触れることができると体感している。広域連携・複数自治体の連携は合意形成までのハードルが高いが、地域と共に地道な対話を重ね、実施し続けていくことが基本姿勢になると考える。



文化芸術×まちづくり 成功のための工夫

● みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ

インタビュー

加藤 芳彦
(カトウ ヨシヒコ)

東北芸術工科大学 地域連携推進課
みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ事務局

開学準備委員会を経て、開学後は約10年間大学の教務課や企画広報等に所属。
美術館大学構想の立ち上げに関わり、地域連携推進課にて、山形ビエンナーレの事務局運営に携わってきた。



成功のための工夫

1. 地域と大学の教育活動、両者にメリットある関係作り

1992年の開学当初、芸術系大学の活動は、話題性はあったが、一般的にはあまり理解されておらず、地域とのウィンウィンの関係が必要だと考えられた。そのため、アートの力で街に賑わいをもたらし、歴史的建造物やリノベーション物件の活用など、街の資源の活用するなど、地域と大学の教育活動の両者に利益をもたらす関係構築に取り組んできた。

2. 教育が地域資源を繋ぎ、市民へ視点や体験

東北芸術工科大学は公設民営大学として、地域資源を活用した教育を展開している。歴史遺産や文化財保存修復をはじめ、各種デザインなど、地域との関わりを重視し、美術館大学構想の一環として、ビエンナーレを通じて、地域と芸術を結びつけている。現代アートやデザインを通じて、地域資源の新たな視点を提供し、学びや自己変容の機会を提供してきた。

3. プログラムディレクター変更を機に体制の見直し

2019年にプログラムディレクターが退職し、芸術監督も変わった。2020年以降は全体を統括するディレクターが不在で、総合プロデューサー、芸術監督、各プロジェクトディレクター（キュレーター）、事務局という体制となった。事務局も複数から1人体制に移行し、会期も1ヶ月連続から金土日祝の週末開催に変更され、労務管理が改善された。

4. 運営資金は、大学の事業費をベースに、積極的な外部資金獲得を目指す

美術館大学構想事業予算を2年間プールして、準備と本番に充てている。その他文化庁の補助金や、寄付金、助成金、協賛金など積極的な外部資金獲得に奔走しながら、当初の予算規模を維持している。広報はあまり予算をかけず、ウェブ系メディアへのパブリシティによる記事配信を中心に、毎回、地元のマスコミとの連携した広報活動を行っている。

5. 市民の主体的な参加が街のにぎわいを創る

美術館大学構想というビジョンのもと、市民講座としてアーティストと共にプロジェクトを行い、その成果をビエンナーレで披露しており、受講者から地域のキーパーソンが生まれている。街のにぎわい創りには、人を多く集めることが一番期待されている。また、市民から便乗企画が持ち込まれるなど、地域の主体的な関わりが大きな成果と考えている。

6. ビジョンに対して愚直に突き進む

山形ビエンナーレは、本学のビジョンのひとつ「地域の持続可能性に貢献する」ことを目的として掲げ、愚直に突き進んでいる。プロジェクトごとの目的と目標を明確にし、進んでいただければと思う。本学教員も、白河市まちなかデザイン事業でワークショップや作品展示に関わっているので、今後も何らかの形でお力になればと思っている。



文化芸術×まちづくり 成功のための工夫

● アウトクロップ

インタビュー

松本 トラヴィス

(マツモト トラヴィス)

取締役COO・ディレクター

札幌出身、6歳の頃カメラを始める。国際教養大学で政治学を専攻。留学先のトロント大学では政治哲学を勉強し、北米弁論大会では準優勝を修めた。13歳で映像の受注制作を開始。在学中に手掛けた短編映画が文部科学大臣賞などを受賞。大学卒業間近に、株式会社アウトクロップを共同創業。『見えない物語を魅せる』をミッションに掲げ、秋田を拠点に国内外でディレクターとして制作活動が続ける。



成功のための工夫

1. 小さくても革新的な活動をストーリーとして伝える

起業のきっかけとなったドキュメンタリー制作において、秋田名物「いぶりがっこ」の元祖となる伝統野菜「沼山大根」と、その復活に取り組む人たちのストーリーを映像としてまとめた。たとえ活動の規模や範囲が小さかったとしても、熱量を持って大きな価値を生み出している人がたくさんおり、そこに自分たちが関わることで価値を掘り起こして伝えていきたいという思いが活動の原点。

2. 地域の伝統文化や歴史に多様な視点をもたらす

地域の魅力を掘り起こしていく際に、できるだけ多様な視点を取り込むことを大切にす。400年続く伝統芸能「釜ヶ台番楽」を取り扱ったアーカイブドキュメンタリーの制作では、一度は途絶えてしまっていた釜ヶ台番楽を、再度旗揚げし、従来は許されていなかった地域外の方の参加の道を開くなど、時代に合わせた変化を創り出した人たちを通じて、伝統芸能を取り巻く多様な視点を取り上げることが意識した。

3. クライアントワークの中でも地域の魅力を伝えていく

クライアントワークとしての映像制作では、クライアントとなる企業のブランドイメージ向上や売上の向上につながることを主たる目的ではあるが、そこに秋田の風土や、その土地に対する思いを伝えるような要素を加えることで、地域の人が自分の地元を好きになってもらえるような要素を入れるようにしている。

4. 自分たちで運営するシネマが広報PRの役割を担う

映像制作を事業として行なっていく上で、クライアントとどう出会うかということは大事なこと。自社で運営しているアウトクロップシネマでは月一回程度の頻度で自分たちが選定した映画の上映会を開催しており、本編がはじめる前の冒頭20分程度は自社で制作した映像を流している。この制作事例を観た人から新規の相談につながることもあり、広報PRの場としてシネマが大きな役割を担っている。

5. 地域住民の価値観が変容する機会を与えてくれるもの

一つの地域で暮らしている中で得られる体験には限りがあるが、アート、特に映像や映画は、自分の今過ごしている場所や時間にとらわれず、違う人の人生を擬似的に体験できるものでもある。アウトクロップシネマでは、映画の上映だけではなく、映画と関連する食体験やダイアログなどの機会の提供を通じて、観る人にとっての気づきや価値観の変容が起こるきっかけになるかどうかを大切にしている。

6. 地域の課題にワンストップで応える拠点づくり

2024年5月、秋田市にAtle DELTAという複合施設をオープン予定。社会課題解決やクリエイションをキーワードに、人が集まり、地域に新しい流れを生み出す場を目指す。さまざまな専門性を持った人が集う拠点がができることで、これまでは東京のような大きな都市に在住している人材に頼っていた部分も、地域の仲間たちで解決できるような体制を築いていくことを目指している。



文化芸術×まちづくり 成功のための工夫

● なら国際映画祭

インタビュー

芹井 祐文
(セリイ ユウヤ)

NPO法人なら国際映画祭 実行委員会 実行委員長

演劇・映画を中心に文化芸術活動家として、文化芸術の普及と人材育成に取り組んできた。なら国際映画祭には、2018年のスタッフ募集をきっかけに運営に携わるようになり、2019年より映画祭実行委員会実行委員長を務める。



成功のための工夫

1. 映画館のない土地で映画文化を育てるための土壌作り

発起人である河瀬直美監督が、映画の制作にはスタッフだけでなく、撮影地となる地域や行政の人との関わりも必要なこと、制作を通して映画作りの文化が地域に出来上がることを体感していた。映画祭開催に向けた地域とのコミュニケーションは、2008年開催の日本とタイの映像文化交流イベントを皮切りに上映会などを開催し、河瀬監督自らが上映会の来場者と直接コミュニケーションをとりながら地域・地元の人との関係を構築してきた。

2. 若手映画監督の映画制作の場としての地域

映画祭の前提として、若手の映画監督に制作の機会を与えるNARAtiveプロジェクトがある。プロジェクトは奈良市・橿原市から始まり、その後他の市町村も加わるようになった。奈良県を盛り上げ、地域の活性化を推進するために、2021年にはNARAtiveの撮影地ネットワーク協議会が設立。撮影地となった地域の行政が一体となって協力し、奈良県全体の魅力を高めることを目指している。

3. 逆境を契機とした体制変化

2016年の奈良市からの補助金カットを経験して、映画祭の体制変更を行なった。具体的には、実行委員会はイベントや映画祭の運営を行う実働部隊、理事会・事務局は協賛や行政・寺社仏閣との関係構築・コミュニケーション担当として役割を分担しつつ、地域での映画制作の場面では相互に連携している。また、映画上映会のボランティアメンバーがリーダー的な動きができるような土台を作ることにもできてきている。

4. 映画祭のための資金と事務局のための資金獲得

撮影地ネットワークでの連携や、行政とのコミュニケーションを密にしながら映画祭のための補助金を活用すると同時に、企業との連携や協賛金の獲得も行なっている。予算としてはそれらが半々となっている。一方、通年を通じた事務局の運営や母体を支える運営資金は、毎年更新制の映画祭会員制度を設けており、その会員の方々に支えてもらっているが、映画祭開催年とそうでない年の差もあり、バランスをとる方法を探っている。

5. 映画制作を通じた地域の魅力発見

映画制作による地域活性化は進んでいると考えている。地域での映画制作では、監督がその地に滞在し、行政や地域の人と対話することやインタビューを行うプロセスを大切にしている。このことで地域の課題が作品の中に取り込まれて作品に反映されていると考えている。これまでに8作品が制作され、制作を通じて繋がった人が地域の魅力を再認識してくれるという成果も出ている。

6. 苦しい時こそ人とつながって継続していく

継続をすること自体は難しく、想いがあってもお金がないこと、人がいないと継続ができないという現実もある。一方、災害やコロナは悲しい出来事でもあったが、映画祭・組織としては成長をした部分もあった。しんどい時こそ人とつながって取り組むことで、次の世代にも活動が伝わると考えている。現在重点を置いている人材育成では、中学生・高校生や大学生世代の映画制作機会創出を通じて映画監督になる人、映画祭を支える人を育てていきたい。



文化芸術×まちづくり 成功のための工夫

● 下町芸術祭

インタビュー

小國 陽佑
(オグニ ヨウスケ)

新長田アートコモンズ実行委員会 実行委員長

大学進学をきっかけに神戸市に移住。NPO法人芸法として神戸市や長田区の公共事業に携わる。2015年よりNPO法人ダンスボックス大谷燐氏が発起人となった下町芸術祭にも携わるようになり、運営主体である新長田アートコモンズ実行委員会実行委員長に就任。



成功のための工夫

1. 土台になったのは、防災空地の整備事業

災害時は一時避難場所や消防活動用地などの防災活動の場として、平常時は広場・ポケットパークなどのコミュニティの場として利用する「まちなか防災空地」の整備やワークショップとの関わりから、地域の人たちと関係を構築。アーティストとのアート表現をやる前に、地域の人に歓迎されることを入り口に活動を実施してきた。地域の活動を礎に芸術祭を開催したため、地域の人に受け入れてもらうことができた。

2. ハレの場を後ろ支える日常性を大事に

芸術祭の運営に携わる参加団体は、芸術祭以外の日常では地域に密着した活動に従事。日々地域との関わり合い・関係性を作り出し、その成果として祭りの場を生み出している。2023年には、地域との関係性が地域の会場提供や地域の物資の提供という形で現れ、地域の協力体制が多彩になりつつある。日常と非日常を交換し地域で喜びを交感する、コンパクトな芸術祭ができないかという意味で、日常性を含んだ芸術祭になってきている。

3. 芸術祭の傘下に複数の参加団体

下町芸術祭は、芸術祭としての冠の元にさまざまな事業者や団体による主催事業がある体制をとっている。展示企画、パフォーマンスアーツ、ラーニングプログラムやガイドツアーなど、芸術祭のテーマや方針などの規格の元に、それぞれの団体が企画を実施しており、この体制でこれまで5回実施してきた。新長田アートコモンズ実行委員会が担うのは広報業務・事務局業務、全体の運営スタッフのコーディネーターやマネジメントなど、全般に関わる架け橋となる業務。

4. 事務局運営の課題と参加事業者負担でのリスクヘッジ

新長田アートコモンズ実行委員会の予算は開催年ごとにバラバラで、事務局費をいかに維持するかは毎回の課題。芸術祭本体は、参加事業者が基礎体力をつければそれぞれが企画や役割を担うことができリスクヘッジになっている。広報は毎年担当している団体が神戸市の広報関係の事業も担っていることが多く、結果的に神戸市の広報事業の中で芸術祭や新長田のアート活動を取り上げてもらえることが多くなっている。

5. よそ者だからできる新たな取り組みを

新長田アートコモンズ実行委員会と芸術祭の始まりは、よそ者が自分たちでできる新たな視点・取り組みであったこと。第5回は「Commons Huck」をテーマに、新たな住人や事業者をどんどん入れていくハック性と、公募制にすることでアーティストから芸術祭をハックしてもらうことを狙った。参加アーティストが地域を交えた芸術活動へのモチベーションが高く、その姿勢に地域の人々も喜んでくれた。

6. 常に視点の転換を

地域の人と協力して開催しつつ、表向きに見えるものとして今までとは全然違うものを作りたいと考えている。これまでのフォームや変遷を踏まえながら新たな挑戦をすることは、新たに人を呼び込むきっかけにもなる。地域の人たちが芸術やこの活動を受容するかに注目し、マイクロプロジェクトだからこその小回りの良さで、社会的な情勢などにも適応しながら柔軟な展開を行い、手触りの実感できる、手触りの実感できる公共圏で互いの違いを理解し関係をじっくり醸成していく芸術祭を目指したい。



文化芸術×まちづくり 成功のための工夫

● BEPPU PROJECT

インタビュー

中村 恭子
(ナカムラ キョウコ)

特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT 代表理事

福岡市生まれ。商社勤務を経て、05年よりアートマネージャーとして活動。08年より福岡市文化芸術振興財団の事業コーディネーター、13年よりフリーランスのコーディネーターとして活動した後、17年BEPPU PROJECTに入社。22年4月より現職。



成功のための工夫

1. 会いにいって話をする。大事なことは何かを必死で考える

BEPPU PROJECTを立ち上げた山出 淳也氏（現Yamaide Art Office 株式会社代表取締役）は、地域の内外の関係者に会いにいって話をすることで理解者・協力者のネットワークを広げた。対話を通じて、自分たちがやりたいことだけではなく、地域が求めていることを理解し、地域に貢献する視点を得たことで現在の活動へと発展してきた。

2. たゆまず地域のことをリサーチし続ける

スタッフひとりひとりが「人に話を聞きに行く」「本や文献を読む」「現場に足を運ぶ」など、たゆまず地域をリサーチし続けている。温泉文化や町の歴史、国際温泉観光都市としての発展の経緯など、地域に住む市民や専門家とともに共同でリサーチをしている。滞在アーティストたちの制作のプロセスも、こうした地域のリサーチを共にするところから始まる。

3. 多様な分野の団体や専門家と協働する

「ALTERNATIVE-STATE」や「Art Fair Beppu」を主催している混浴温泉世界実行委員会は、アートの専門家に加え、経済、観光、教育、まちづくりに関わる団体や、交通インフラを担う民間企業やメディアなど、地域づくり・地域活性に関わる幅広い分野の団体や専門家によって構成されている。多様な分野の団体や専門家と協働することで、地域にとって必要な活動となることを目指している。

4. 縦割りを超えて幅広い分野で事業を展開

アートやクリエイティブを軸とし、文化芸術にとどまらず、移住促進、観光振興、福祉や教育、産業活性など、幅広い分野で事業を展開していることが強みとなっている。また、その多くが受託事業であることも特徴の一つ。顧客も、アートファンだけでなく、市民、インバウンド観光客など幅広く、それぞれのターゲットに合わせた事業を展開している。

5. アート作品を通じて別府の町を深く体験してほしい

滞在制作に来るアーティストを選ぶ上で、「地域に向き合い、別府だからこそできる作品にチャレンジしてくれるかどうか」を重視する。鑑賞に訪れる人にとっても、アート作品を通じて別府の町そのものを深く体験してもらいたいと思っており、美術館などの施設内よりも、屋外や古くからある建物を会場にすることが多く、アート作品とともに別府らしい風景がSNSなどで発信されていくことも期待している。

6. 新しい何かに挑戦できる可能性に開かれている町でありたい

別府市ではアーティストやクリエイターの移住をさらに進めていく姿勢を打ち出しており、今後アーティストの制作場所などを増やすことに加えて、アーティストたちが能力を発揮しながら生きていける町であることを目指している。そのためには、人々がアーティストに出会い、彼らを応援する意味で作品を購入できる場が必要と考え、「Art Fair Beppu」を始めた。この町ではいつも新しい何かが創られている、新しい何かに挑戦できる可能性に開かれている、別府はそんな面白い町であるということを発信し、地域のブランド向上に繋げたい。



文化芸術×まちづくり 成功のための工夫

● Reborn-Art Festival

インタビュー

松村豪太

(マツムラ ゴウタ)

一般社団法人 ISHINOMAKI2.0 代表理事

石巻市の生まれ、育ち。
津波被害にあい自宅も半壊するが、震災をきっかけにまちづくりの新しいモデルを作るべくISHINOMAKI2.0を立ち上げる。Reborn-Art Festival実行委員会事務局長。



成功のための工夫

1. 自治体と協力し、震災復興と国際芸術祭を築く

2015年にReborn-Art Festivalの実行委員会が発足し、石巻市との連携が強化。一般社団法人apbankと、未来へのアイデアや復興支援が推進した。ISHINOMAKI2.0も政策により業務委託を受けるまでに至る。この関係から、石巻市と一般社団法人apbankの連携の橋渡しをし、協力体制が築かれ、石巻市産業推進課がReborn-Art Festivalの担当課となる。

2. 食と音楽とアートで地域のポテンシャルを引き上げる

「Reborn-Art」というコンセプトは、中沢新一氏によって提案され、古来から生きる術を表す。テーマの食、音楽、現代アートは地域のポテンシャルを引き出す要素であり、音楽はapbankのリソースを使い、食は、発信力ある資源として扱われる。現在、地元の料理店の阿部氏と今村氏がフードディレクターを務め、石巻の外部と内部の協力で国際芸術祭をディレクションしている。

3. 外部のプロの運営からローカルへ移行

2016年のプレイベントや2017年の第1回本祭では、経験豊かな外部の人間を中心に運営を開始。2019年以降は地元の若者を中心に20-30人で運営。スタッフリーダーや事務局メンバーも地元出身者が増え、運営体制をローカルに移行した。

4. 活動継続のためのマネタイズと広報

2015年に発足したReborn-Art Festivalの実行委員会は、石巻市や宮城県の支援で費用を補填し、実行委員長の小林氏の影響力もあり、大企業からの支援を得ている。広報は新聞やテレビを主に活用している。2019年以降、常設作品への来場者の増加が見られ、これを踏まえ、広報戦略とメッセージングを改善し、来場者の増加と興味喚起に努めている。

5. 国内外からの参加を見据えた国際芸術祭

東京のワタリウム美術館の和多利恵津子氏と和多利浩一氏がキュレーションを担当。"被災"を機に始まったが、一過性で終わらない継続した活動を目指している。そのため、国内外のアートコミュニティから評価されるアーティストを厳選し、体験価値を提供している。

6. クリエイティブに妥協せず、可能性の土壌を作る

地方の未来には、わかりやすさや経済効果だけでなく、可能性を感じられる場所が重要だと考える。そのためには、クリエイティブへのリスペクトが不可欠であり、その思いを持って行動したことで、共感した小林氏と出会い、協働が始まった。福島の人々にアーティストとの経験や必要な情報を提供したい。

ヒアリング項目別
インタビューの回答録（抜粋）



地域コミュニティとの連携について

● Question

活動を始める際

どのように地域コミュニティと連携し
関係性を築いていったのでしょうか？





地域コミュニティとの連携について

- Q : 活動を始める際、どのように地域コミュニティと連携し、関係性を築いていったのでしょうか？

L'Aquila Film Festival

- A : 強力なアウトリーチ戦略が必要

ラクイラには、もともと非常に結びつきの強いコミュニティがあり、特に映画ファンのネットワークは強固でした。LAQFFの初期の活動に関する情報は、口コミで素早く広がっていきしました。震災後、町から人々が離れてしまった時期には、ヴィットリーニ氏は直接会って関係性を維持するよう努めました。イベント後に観客の意見を聞いたり、リクエストに可能な限り応えたりと、住民との双方向のコミュニケーションを大切にしています。そのため、地元の人々は積極的に協力してくれます。ヴィットリーニ氏は、住民の町への思いを「病気の親類の世話をするようなもの」と表現しており、住民のラクイラの再興に向けた強い意欲を感じていました。

PASSAGES INSOLITES

- A : 地元住民と一對一の会話が鍵

EXMUROの活動、およびPASSAGES INSOLITES、まずコミュニティから始まります。地域の人たちのニーズや求めているものを理解するために、地域の人たちから意見を聞くようにしています。また、地元の人々はボランティアで設営を手伝ったり、フェスティバルの一部分をキュレーションしたりします。個人的な交流は非常に重要であり、そのため毎年数回のボランティア交流会や地元の人々のためのハッピーアワーを開催しています。特にPASSAGES INSOLITESでは、いくつかのアート作品の近くにスタッフが来場者とアートについてざくばらんに話し、好奇心と内省を促しています。こういう活動を通じて、人々が対等にアートに対する意見を述べることを促進し、当事者意識を与えます。



地域コミュニティとの連携について

- Q : 活動を始める際、どのように地域コミュニティと連携し、関係性を築いていったのでしょうか？

Prospect New Orleans

- A : 既存の強いコミュニティを基盤に
双方向のコミュニケーションを大切に

ニューオーリンズには、すでにマルディグラとジャズフェストという国際的に認知されたフェスティバルがあります。そのため、プロスペクトはコミュニティ・アーティストの重要な募集枠を特定し、的を絞ったアウトリーチを行わなければなりません。初期の頃は、コミュニティ活動が戦略的に行われておらず、資源を非効率的に使っていました。そのため、現在では、コミュニティがどのようなイベントを望んでいるかに影響を与える地元や国内のトレンドを、チームは強く意識しています。ニューオーリンズ住民が関心を寄せている課題に対応するアート、または地元と住民に関連している経験と作品を持つアーティストをキュレーションしています。

大地の芸術祭

- A : 繰り返し芸術祭の説明会を重ね 信頼を獲得

芸術祭の構想が始まった当初は、会場となる6市町村（現在の十日町市と津南町）の首長・議会や住民を含め「アートでの地域活性化」の理解を得ることが課題でした。しかし、芸術祭総合ディレクターの北川フラム氏が熱意を持って首長や地域の集落への説明を行い、芸術祭にチャレンジをするための信頼関係を構築しました。また、第1回で「こへび隊」としてボランティアに参加したのはアートによる地域活性化や、北川さんのディレクションで、世界からやってくる著名なアーティストたちと新しいことに取り組むことに興味を持つ、地域外の美術系の学生が多かったのですが、そうした若い人の存在を通して、「芸術祭がアートを介して地域の価値を見せている」という理解が広がり始めました。



地域コミュニティとの連携について

- Q : 活動を始める際、どのように地域コミュニティと連携し、関係性を築いていったのでしょうか？

みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ

- A : 地域と大学の教育活動 両者にメリットある関係作り

大学が開学した1992年当時、地域には他に4年制大学がひとつしかなく、特に芸術系の大学は「絵描きの人たちが集まって、よくわからないことをやっているところ」と思われていることも、一般的であったように思います。キャンパスが市の中心部から離れた山の麓に位置していたこともあり、話題性はありましたが、あまり認知はされていませんでした。活動が受け入れられ、学生の教育成果へ還元していくには、地域と大学がお互いにメリットのあるウィンウィンの関係作りが必要です。具体的には、山から街に下りていき、集客に力を入れ、目に見える実績を作り、経済効果を実感していただきながら、地域のキーパーソンとの関係をきちんと形成し続けることが重要です。大学の教育活動の一環として、歴史的建造物やリノベーション物件などを使用してほしい、というニーズに対応する等、地域と大学の双方にメリットのある関係作りに、努めてきました。

なら国際映画祭

- A : 映画館のない土地で映画文化を育てるための土壌作り

映画監督河瀬直美氏が様々な映画祭に参加する中で、「映画祭が好きであることの背景に地域が好きである」ことを映画祭を支える人から聞き感銘を受け、それが、自身の故郷である奈良で映画祭を開催したいという想いに繋がったと聞いています。映画の制作にはスタッフだけでなく撮影地となる地域や行政の人との関わりも必要であることを認識されていて、制作を通じた映画作りの文化が出来上がることも体感されていました。映画祭開催に向けた地域とのコミュニケーションは、2008年に開催した日本とタイの映像文化交流イベントのシンポジウム「タム君、奈良に来たる！」を皮切りに、上映会を開催し、河瀬監督自らが上映会の来場者と直接コミュニケーションをとりながら、関係を構築してきました。



地域コミュニティとの連携について

- Q : 活動を始める際、どのように地域コミュニティと連携し、関係性を築いていったのでしょうか？

アウトクロップ

- A : 小さくても革新的な活動をストーリーとして伝える

アウトクロップという会社は、当時秋田県にある国際教養大学に在学していた仲間と創業した会社です。起業のきっかけとなったドキュメンタリー制作において、秋田名物「いぶりがっこ」の元祖となった伝統野菜「沼山大根」と、その復活に取り組む人たちのストーリーを映像としてまとめました。こうした地域にある商店の店主や野菜の生産者など、たとえ活動の規模や範囲が小さかったとしても、熱量を持って大きな価値を生み出している人がたくさんいます。むしろ社会の中で主流になっていないようなことでも、自分たちが関わることで価値を掘り起こして伝えていきたいという思い「アウトクロップ」という社名にも込めています。

下町芸術祭

- A : 土台になったのは 防災空地の整備事業

神戸市には密集市街地まちなか防災空地事業という制度があります。密集市街地において火災などの延焼を防止するスペースを確保することを目的に、災害時は一時避難場所や消防活動用地、緊急車両の回転地などの防災活動の場として、平常時は広場・ポケットパークなどのコミュニティの場として利用する空地整備のことです。2013年ごろから空地整備のワークショップに関わってきて、地域の人たちとシームレスに関係を作れるような場を設計してきました。越してきたばかりの時は、地域住民さんに当初警戒されていました。ただ、なるべくアーティストの発案するアート表現をいきなるのではなく、地域の人たちにまず歓迎されることを入り口に、活動をはじめました。2013年から2015年までの地域活動を礎に芸術祭を開催。それらの活動なしにいきなり芸術祭をやったら、たぶんすごい反発はあったと思います。



地域コミュニティとの連携について

- Q : 活動を始める際、どのように地域コミュニティと連携し、関係性を築いていったのでしょうか？

BEPPU PROJECT

- A : 会いにいって話をする。大事なことは何かを必死で考える

別府市は戦災を逃れて残っている細い路地やレトロな建物が多く残り、温泉の湯けむりがそこら中に立ち上っています。BEPPU PROJECTを立ち上げた山出 淳也さん（現Yamaide Art Office 株式会社代表取締役）は、こういう面白い風景のある別府に、世界各地で出会ったアーティストが来たらどんな表現をしてくれるのだろうか？それを見たいと考え、別府での国際芸術祭を開催を思い立ちました。山出さんは当時海外に住んでいたこともあって、別府に人脈があるわけでもなかったのですが、唯一と言っても過言ではない別府在住の知り合いが共感してくれ、その人と一緒に地域のさまざまな方に会いにいって、自分の思いを話し、理解者・協力者のネットワークを広げていきました。また、市の助成金に申請することもありましたが、結果は不採択。審査員の方のコメントを真摯に受け止め、「このままではいけない、どうしたら良いか、大事なことはなにか」ということを必死で考え、ただ自分たちの好きなこと・やりたいことを一方的に語るのではなく、相手が求めていることはなにか・どうしたら地域に貢献できるかから考えなければならないということに気がきました。この気付きは大きな一歩だったと思います。

Reborn-Art Festival

- A : 自治体と協力し 震災復興と国際芸術祭を築く

2015年にReborn-Art Festivalの実行委員会が発足し、一般社団法人apbankと石巻市と復興支援や未来へのアイデアについて協力を求めた結果、石巻市との連携が強化されました。松村氏が代表を務めるISHINOMAKI2.0も当初、石巻市との接点がなかったものの、後に政策により業務委託を受けるまでに至りました。そして、ISHINOMAKI2.0の松村氏が接点を持ち、一般社団法人apbankと石巻市の間で協力体制が築かれ、石巻市産業推進課がReborn-Art Festivalの担当課となるなど石巻市も深くかかわっています。

地域性(その地域らしさ・魅力)の活かし方について

● Question

地域の文化資源や歴史と 活動との接続
について どのような方針をもって
活動されていますか？





地域性（その地域らしさ・魅力）の活かし方について

- Q : 地域の文化資源や歴史と活動との接続について、どのような方針をもって活動されていますか？

L'Aquila Film Festival

- A : 新しい文化を育みつつ 歴史と自然も大切に

震災を経験したラクイラの人々の多くは、震災を乗り越え、新しいラクイラの姿に目を向けたいと考えています。一方で、歴史的建造物の復旧も進んでおり、LAQFFの上映会もそうした建物で行われることが多いです。このように、ラクイラは歴史を大切にしながらも、新しい時代を受け入れようとしています。また、アブルッツォ州のグラン・サッソを中心とする山岳地帯は、LAQFFの子会社であるFestival de Gran Sassoの主な舞台となっており、現在のLAQFFの活動に欠かせない存在です。山と人間をテーマにした映画の上映が、グラン・サッソとモンティ・デッラ・ラーガ国立公園の美しい環境の中で行われることで、観光振興にもつながっています。

PASSAGES INSOLITES

- A : 地域の歴史や建築とアートを融合させ
過去と現在の両方を語る

PASSAGES INSOLITESのアート・サーキットはケベック歴史地区を巡るため、ロイ氏はその場所の歴史や建築の特徴を引き出すようなサイト・スペシフィックな作品を意図的に選んでいます。例えば、2022年に展示されたアイ・ウェイウェイの「ライフジャケット」は、ギリシャのレスボス島の海岸で回収されたライフジャケットで構成されています。難民が身につけていたこれらのジャケットを、潮の満ち引きで水位が変化する水路に設置することで、まるでアートが呼吸しているかのように浮き沈みする様子を表現しました。このように、地域の歴史や文化を体感できる場所そのものがPASSAGES INSOLITESの舞台となっているのです。



地域性（その地域らしさ・魅力）の活かし方について

- Q : 地域の文化資源や歴史と活動との接続について、どのような方針をもって活動されていますか？

Prospect New Orleans

- A : 地元のアーティストを招き 自分たちの街を変えていく

プロスペクトは、ニューオーリンズを拠点とするアーティストの幅広いネットワークを活用し、ニューオーリンズの街とその歴史に対する彼らの視点をアートに反映させています。例えば、最近スタートした「Artists of Public Memory」シリーズは、ルイジアナ州のアーティストに、ニューオーリンズの公共空間に恒久的なインスタレーションを制作してもらうというものです。このフェスティバルは、街中の美術館や文化施設、公共スペースに点在しています。ニューオーリンズの文化的な試金石といえば音楽であるため、プロスペクトでは、例えば展示と同時にミュージシャンに演奏してもらうなどして、それを作品に取り入れようとしています。

大地の芸術祭

- A : 市町村合併を前提にした広域地域連携が基盤に

この地域は高速道路や新幹線、当時はほくほく線などもなく、新潟県内でも高齢化・過疎化が進む地域だったことから、地域活性化の施策として95年から「越後妻有アートネットワーク整備構想」が始まりました。この構想には、芸術祭のほかにも柱になるプロジェクトがあり、地域資源の再発見、場の接続、地域の魅力発信の交流拠点確立に取り組んでいました。北川ディレクターが著書で触れているおじいちゃんおばあちゃんの笑顔をはじめ、まずは交流人口を増やす、広域地域の人たちが、地域の魅力をもう一度地域の人で再認識をして、それを皆さんに見ていただいて、活動をして楽しんでいただく。そういった取り組みで活性化とか、地域の集落を元気にするための活動が基盤にありました。



地域性（その地域らしさ・魅力）の活かし方について

- Q : 地域の文化資源や歴史と活動との接続について、どのような方針をもって活動されていますか？

みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ

- A : 教育が地域資源を繋ぎ 市民へ視点や体験を提供

全国初の公設民営大学ということもあり、東北芸術工科大学自体が地域資源を素材に教育を行っている。そのため、歴史遺産から文化財保存修復、地元の伝統工芸産業や各種デザインまで、日々の教育の中で日常的に、地域との関係性が築かれています。美術館大学構想をビジョンに掲げる大学の教育の延長線上にビエンナーレが存在し、地域の文化財の展示や、ワークショップでの地元産材料の提供、人的資源としては職人さんや郷土史家、山伏などが参加、食文化では地産地消でマルシェを実施するなど、ビエンナーレの準備から運営まで地域と芸術が繋がり、作られています。

また、来場者や市民には、現代アートやデザインのフィルターを通して、地域資源の現代的な見方を提示し、新しい学びや自己変容のきっかけを提供しています。

なら国際映画祭

- A : 若手映画監督の映画制作の場としての地域

なら国際映画祭は、その前提として若手の映画監督に制作の機会を与えるNARActiveプロジェクトがあります。これは、長編作品の制作が1作品か2作品目監督を対象としたもので、制作発表・コンペティションの場として映画祭が位置付けられています。プロジェクトは奈良市・橿原市から始まり、その後他の市町村も関わっていきました。奈良県を盛り上げ、地域の活性化を推進するために、2021年にはNARActiveの撮影地ネットワーク協議会が設立されました。撮影地となった地域の行政が一体となって協力し、奈良県全体の魅力を高めていこうとしています。また、奈良県という世界遺産のある土地での映画祭なので、それが1つの魅力でもあると思います。



地域性（その地域らしさ・魅力）の活かし方について

- Q : 地域の文化資源や歴史と活動との接続について、どのような方針をもって活動されていますか？

アウトクロープ

- A : 地域の伝統文化や歴史に多様な視点をもたらす

地域の魅力を掘り起こしていく際に、できるだけ多様な視点を取り込むことを大切にしています。たとえば、秋田県にかほ市の釜ヶ台で400年続く伝統芸能「釜ヶ台番楽」を取り扱ったアーカイブドキュメンタリーを制作したことがあります。この映像の中で、人口減少もあり、参加者が少なくなった結果として一度は途絶えてしまっていた釜ヶ台番楽を、再度旗揚げし、地域外の方も参加できるよう緩和を図った人たちのストーリーを紹介しています。地域の伝統を守るために、従来は許されていなかった地域外の方の参加の道を開くなど、時代に合わせた変化を創り出した人たちを通じて、伝統芸能を取り巻く多様な視点を取り上げることを意識しました。

下町芸術祭

- A : ハレの場を後ろ支えする日常性を大事に

芸術祭の運営に携わる参加団体は、普段地域に密着した活動を行っています。また、アートを専門領域として活動する団体に限らず、医療や障がい者支援、飲食店や工務店、など多彩です。それら参加団体が日常的に地域との関わり合い・関係性を作り出し、それらの成果として祭りの場を生み出すことができていると思います。それが顕著なのが、2023年の開催では、金銭的な援助（企業協賛、個人寄付など）に限らず、展示会場や物資提供であったり、スタッフの手配であったり、アーティストの滞在や制作場所の提供だったり地域との協力体制も多彩になりつつあります。その中で、いかにサイクルとして無理のない、日常と非日常を交換し地域で喜びを交感するような、コンパクトな芸術祭ができないかという意味で、最近は適度なサイジングによる日常性をすごく含んだ芸術祭にはなってきました。



地域性（その地域らしさ・魅力）の活かし方について

- Q : 地域の文化資源や歴史と活動との接続について、どのような方針をもって活動されていますか？

BEPPU PROJECT

- A : たゆまず地域のことをリサーチし続ける

まずは、スタッフひとりひとりが「人に話を聞きに行く」「本や文献を読む」「現場に足を運ぶ」など、たゆまず地域をリサーチし続ける、ということが肝です。別府はリサーチすることには事欠かない地域です。たとえば、別府にある独特な温泉文化や、そもそも温泉がなぜ湧くのかという地質学的なアプローチ、そしてそこには何万年前という単位の歴史もあります。また、国際温泉観光都市として産業がどのように発展していったのか、人々の暮らしや町の風景がどう変化していったのか。町の写真や絵葉書など、いろんなものをコレクションしている人たちもいっぱいいます。滞在制作で訪れるアーティストたちとは、こうした地域のリサーチを共にするところから始めます。

Reborn-Art Festival

- A : 食と音楽とアートで地域のポテンシャルを引き上げる

「Reborn-Art」というコンセプトは、災害からの生存だけでなく、古来より厳しい状況からの生き抜いてきた知恵や技術を指し、宗教学者・人類学者の中沢新一氏によって提案されました。食と音楽と現代アートは地域のポテンシャルを引き出す要素であると考えています。音楽は、apbankの音楽の力で環境問題に投じるリソースを活用し、食は、美味しいもの、可能性があるものを外部の力をいただいて、発信力ある資源として扱っています。開始当初、フードディレクターを目黒氏が務め、そこから現在はローカルに移り、地元の老舗料理店「滝川」の阿部氏と震災後に仲間と店舗を開いた「いまむら」の今村氏が務めています。このテーマを通して、石巻の外部からのリソースや視点と内部との協力体制で作られ、国内外から評価、支持される国際芸術祭を目指しています。

活動を持続・発展させる仕組みについて

● Question

活動の持続や発展のために
運営体制で
工夫していることは何ですか？





活動を持続・発展させる仕組みについて

- Q : 活動の持続や発展のために、運営体制で工夫していることは何ですか？

L'Aquila Film Festival

- A : チームは小さくても 地域と協力して運営する

LAQFFは、ヴィットリーニ氏が唯一の常勤スタッフとして始動しました。震災後、一時的に運営が不安定になりましたが、現在は4~6人の常駐スタッフが地域と協力して運営しています。例えば、上映会場の設営・撤収には地元農家のトラクターを借りたり、地域メディアを通じて情報を発信したりしています。また、「ファンのアーカイブ」と呼ばれる熱心なファンとの直接的なコミュニケーションを通じて、イベントのアイデア出しや企画立案を行っています。更に、大学や美術館、科学センターなどとも連携し、多様なイベントを共同開催しています。限られたスタッフでも、地域の様々なリソースを有効活用することで、持続可能な運営を実現しているのです。

PASSAGES INSOLITES

- A : 一貫したビジョンを共有するチームを育てる

EXMUROにとって、最初の展覧会が大きなターニングポイントとなりました。ロイ氏は自身の写真作品を初めて公共の場で展示し、ギャラリー以外でも多くの人々がアートに触れることを実感しました。この経験から、彼は他のアーティストとも公共の展示会を企画し、オーガナイザーの重要性和自身のビジョンを発見しました。その後、スタッフは6人から14人以上に倍増し、常連ボランティアも数十人に上りますが、EXMUROの組織構造とビジョンは一貫して変わっていません。スタッフがビジョンに共感して集まれば、より自発的に行動し、困難な時期にも粘り強く働き続けることができるのです。ロイ氏は、設立時のビジョンを大切にするために、それに共鳴する人材を集めることに注力しています。EXMUROの原動力は、このビジョンを理解し実現しようと努力するチームなのです。



活動を持続・発展させる仕組みについて

- Q : 活動の持続や発展のために、運営体制で工夫していることは何ですか？

Prospect New Orleans

- A : 健全でバランスの取れたチームを作る

LAQFFは、ヴィットリーニ氏が唯一の常勤スタッフとして始動しました。震災後、一時的に運営が不安定になりましたが、現在は4~6人の常駐スタッフが地域と協力して運営しています。例えば、上映会場の設営・撤収には地元農家のトラクターを借りたり、地域メディアを通じて情報を発信したりしています。また、「ファンのアーカイブ」と呼ばれる熱心なファンとの直接的なコミュニケーションを通じて、イベントのアイデア出しや企画立案を行っています。更に、大学や美術館、科学センターなどとも連携し、多様なイベントを共同開催しています。限られたスタッフでも、地域の様々なリソースを有効活用することで、持続可能な運営を実現しているのです。

大地の芸術祭

- A : 担当部局の職員だけでなく 全庁的に芸術祭に取り組む

実行委員会を担う行政側では、芸術祭を経験した職員を少しずつ入れ替えてナレッジの継承に努めています。芸術祭が「十日町の財産」と位置付けられており、十日町市役所全体で部局の枠を超え全庁的に取り組んでいます。交流人口増加を芸術祭の目標の1つとしていることから、観光協会との連携も行っています。また、2008年にアートの専門会社と行政の中間で作品の管理や恒久施設での企画を担うNPO法人越後妻有里山協働機構が立ち上がり、連携と役割分担をしながら事業を進めています。NPOへの委託内容については、芸術祭が終わるタイミングで施設や作品について運営方針を相談し、外部機関も含めてすり合わせを行いながら、新規の指定管理委託などは、およそ1年かけて決定しています。



活動を持続・発展させる仕組みについて

- Q : 活動の持続や発展のために、運営体制で工夫していることは何ですか？

みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ

- A : プログラムディレクター変更を機に体制の見直し

当初から3回1タームで体制変更の予定でしたが、大きな体制の変更として、2019年にプログラムディレクターが退職し、芸術監督も変わりました。2020年の第4回以降は、全体を統括するディレクターが不在で、総合プロデューサー、芸術監督、各プロジェクトディレクター（キュレーター）、事務局の体制となりました。それまでは事務局も、複数体制でプロジェクトのマネジメントにも関わっていましたが、地域連携推進課は他にも複数の業務を所管しており、負担が大きかったため、第5回の2022年から、ビエンナーレ担当は1人として、プロジェクトマネジメント全般はディレクター陣が担当することに。また、2016年の第2回までは会期が1ヶ月間だったところを、2018年以降は金土日祝の週末開催に変更することで、大幅な労務管理の改善を図りました。

なら国際映画祭

- A : 逆境を契機とした体制変化

2016年に奈良市からの補助金がカットされました。逆風の中で支えてくれる人もたくさんいたので、映画祭自体は成功という形になりましたが、徐々にスタッフへの負担は大きくなり、2019年に体制変更を行いました。具体的には、実行委員会と理事会・事務局のメンバーを分けて、実行委員会はイベントや映画祭の運営を行う実働部隊、理事会・事務局は協賛や行政・寺社仏閣との関係構築・コミュニケーション担当として役割を分けました。地域での映画制作の場面では、相互に連携もしています。また、毎月実施している映画上映会のボランティアメンバーとの連携を密にできており、それぞれがリーダー的な動きができるような形を作ることができてきました。その結果、専門的な部分は別として、実行委員会・事務局のメンバーがいなくても会場の運営ができる仕組みが出来上がってきました。



活動を持続・発展させる仕組みについて

- Q : 活動の持続や発展のために、運営体制で工夫していることは何ですか？

アウトクロープ

- A : クライアントワークの中でも地域の魅力を伝えていく

主たる事業活動である映像制作においては、基本的にクライアントとなる企業がいて、プロモーションなどの一環として活動するケースが多いです。そのため、その会社のブランドイメージの向上や商品・サービスの売上向上につながるという点をも当然意識しています。ただし、それと同時に、秋田という土地で事業をしている意味や風土など、土地に対する思いを代弁し、映像を観る人にとってはその土地に対する愛着を持ってもらえるようにということも意識しています。特に、地域の住民にとってのシビックプライドの向上というのは自分たちが大切にしているテーマで、クライアントワークの中にも、こちらからの提案として地域の人が自分の地元を好きになってもらえるような要素を入れるようにしています。

下町芸術祭

- A : 芸術祭の傘下に複数の参加事業が

下町芸術祭は、芸術祭としての冠の元に、色んな事業者や団体による主催事業があるというイメージです。例えば、芸術祭の中で、NPO法人芸法の主催の展示企画イベントをやっている。ほかの団体でいえば、パフォーミングアーツのイベントもあれば、ラーニングプログラムイベントもあれば、ガイドツアーイベントもある。芸術祭というひとつのテーマや方針・または開催時期などの大まかな規格を元に、それぞれの団体がしたいことをするというスタイルです。大まかな方針としては変わらずにこれまで5回開催してきました。新長田アートコモンズ実行委員会として担っているのは、広報業務とか事務局業務とか全体の運営スタッフのコーディネーターやマネジメントなど、全般に関わる架け橋みたいな業務を主にしています。



活動を持続・発展させる仕組みについて

- Q : 活動の持続や発展のために、運営体制で工夫していることは何ですか？

BEPPU PROJECT

- A : 多様な分野の団体や専門家と協働する

たとえば「ALTERNATIVE-STATE」や「Art Fair Beppu」を主催している混浴温泉世界実行委員会は、BEPPU PROJECTが事務局を担っていますが、この委員会は文化芸術振興だけでなく、観光振興や地域活性化を担う人材育成に寄与するを目的に活動しています。この実行委員会は、アートの専門家だけでなく、経済団体、観光関連団体、教育機関、交通インフラを担う民間企業やメディア、まちづくり団体など、地域づくり・地域活性に関わる幅広い分野の団体によって構成されているのが特徴です。さまざまな分野の観点から事業を展開することで、地域にとって必要な活動となることを目指しています。

Reborn-Art Festival

- A : 外部のプロの運営からローカルへ移行

運営体制は、2016年のプレイベントや2017年の第1回本祭では、大規模フェスの経験豊かな外部の人間を中心に運営を開始しました。運営体制をローカルに移していきたいというアイディアは開催当初から存在し、2019年以降、スタッフリーダーのポジションを地元の若者（農家の若者など）が担うなど20-30人を中心に運営を回しています。事務局のメンバーも地元の美大出身など地元出身者の割合が増えました。

活動を持続・発展させる仕組みについて

● Question

活動の持続や発展のために
広報・資金繰りの仕方で
工夫していることは何ですか？





活動を持続・発展させる仕組みについて

- Q : 活動の持続や発展のために、広報、資金繰りの仕方で工夫していることは何ですか？

L'Aquila Film Festival

- A : 公的資金で映像芸術祭の活動範囲を広げる

LAQFFは、イタリア文化省、ラクイラ市、アブルッツォ州政府、そして不特定多数の民間団体から寛大な援助を受けており、その大部分は公的資金で運営されています。これらの資金源に加え、LAQFFの地域社会への献身的な貢献により、イベントは無料で一般公開されています。また、他の映画祭のように出品料を徴収することはありません。このような参入障壁の低さが、LAQFFの文化的インパクトを拡大し、グラン・サッソのような場所を見るため、あるいはフェスティバルや地元地域を楽しむために人々を引き寄せています。

PASSAGES INSOLITES

- A : アートそのものを広告とし 多様な収入源を確保

広報面では、アートそのものと、それに添えられた説明文やEXMUROの活動紹介を重視しています。つまり、アート自体が最大の広告と考えています。一方、資金繰りについては、助成金や公的資金が主な収入源ですが、EXMUROは多様なビジネスモデルと収入源を持つことが生き残るカギだと考えており、近年はチケット販売やグッズ、upcoming cafeなどの自主財源にも力を入れ始めました。また、アート・サーキュレーション・プログラムでは、公共アートの作品を世界中に貸し出しています。これは、アーティストにとっては新たな収入となり、EXMUROにとっては持続可能なアート制作の方法となっています。ロイ氏は、NPOには企業家精神が重要だと述べています。EXMUROは常に向こう5年間の課題と機会を見据え、成長や資金調達、新たな挑戦の可能性を模索し続けています。



活動を持続・発展させる仕組みについて

- Q : 活動の持続や発展のために、広報、資金繰りの仕方で工夫していることは何ですか？

Prospect New Orleans

- A : 安定した財務基盤を築く

資金調達は、主に民間の財団からの助成金と個人からの寄付で成り立っています。政府の支援がない分、資金の用途を自由に決められるのがメリットです。また、収入源の多様化や基金の設立にも取り組んでいます。しかし、3年サイクルの中でスタッフが大きく入れ替わるため、雇用の不安定さが問題になったこともありました。そのため、銀行からの信用供与枠などの金融セーフティネットを確保し、安定した財務基盤を築くことを重視しています。これにより、スタッフのストレス軽減とプロジェクトの質の向上を目指しています。

大地の芸術祭

- A : 複数財源の確保とターゲットに合わせた広報

芸術祭の実行委員会予算は十日町市と津南町で1億2千万円と、トリエンナーレのパスポート売り上げ、寄付・協賛、国からの助成金が資金源です。パスポートの収益は、販売目標金額や枚数を早期に立てて戦略的に実施しており、ここ2年ほどは安定してきています。ただ、やはり変動もあるので企業からの協賛や助成金も獲得しています。実行委員会予算とは別に、市の持ち出し予算と助成金などで構成される単独予算があり、恒久作品や施設への投資に充てています。広報については実行委員会とNPOでそれぞれ取り組んでいて、実行委員会は主に県内への広報・ローカル紙へのアプローチをしています。取材が入る時には、広報の媒体や取材される内容によって受ける母体やインタビューを調整しています。



活動を持続・発展させる仕組みについて

- Q : 活動の持続や発展のために、広報、資金繰りの仕方で工夫していることは何ですか？

みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ

- A : 運営資金は 大学の事業費をベースに積極的な外部資金獲得を目指す

事業予算は、これまでの美術館大学構想事業予算を2年分プールして、準備と本番の運営に充てています。第1回の2014年には、前年度から採択された文化庁人材育成補助金その他、復興支援の寄付金もあり、一定規模の事業費が確保された状態でスタートしましたが、2016年以降は、復興支援の寄付金がなくなり、各種団体の助成金や、大学後援会企業の協賛金など、積極的な外部資金獲得に奔走しながら、予算規模を維持しています。広報に関しては、あまり予算をかけずに、ウェブ系メディアへのパブリシティによる記事配信を中心に、アーティストやディレクターなど、関係者のSNSで情報を拡散しています。2020年はオンライン開催であったため、メディアミックスに力を入れ、地元テレビ局で帯番組を編成してもらったり、地元新聞記者の協力で、プロジェクトで発行する新聞との間で、相互に紙面ジャックをしました。地元マスコミと連携した広報活動は、工夫しながら、毎回行っています。

なら国際映画祭

- A : 映画祭のための資金と事務局のための資金獲得

NPOは収益性を持つことができないため、撮影地ネットワークなどを通じたり、行政とのコミュニケーションを密にしながら補助金を活用させてもらっています。また、2016年の補助金全額カットの経験から企業との連携や協賛金の獲得も行なっていて、予算としては補助金と企業からの資金で半々になっています。一方、補助金や助成金はイベント開催が前提となるため、通年を通じた事務局の運営や母体をさせる資金にならず、課題に感じている部分です。事務局の運営は映画祭の会員制度を設けていて、その会員の方々に支えていただいています。ただ、まだ2年に1回の大きな映画祭というイメージが払拭できず、奇数年・偶数年でのバランスが悪く、うまくバランスをとりながら進める方法を現在試行錯誤しています。



活動を持続・発展させる仕組みについて

- Q : 活動の持続や発展のために、広報、資金繰りの仕方で工夫していることは何ですか？

アウトクロップ

- A : 自分たちで運営するシネマが広報PRの役割を担う

映像制作を事業として行なっていく上で、クライアントとどう出会うかということは大事なことです。これについて、自社で運営しているアウトクロップシネマが重要な接点となっています。ここでは月一回程度の頻度で映画の上映会を開催しているのですが、本編がはじめる前の冒頭20分程度は自社で制作した映像を流しています。その映像を一番最初に観られるのがこの場所ということもあって、楽しみにしてくださっている方たちもいます。こうして制作事例を観てもらって新規の相談を獲得していく広報PRの場としてシネマが大きな役割を担っています。

下町芸術祭

- A : 事務局運営の課題と参加事業者負担でのリスクヘッジ

新長田アートコモンズ実行委員会の予算は開催年ごとにバラバラで、実行委員会として必要最低限の事務局費をいかに維持するかは毎回課題に挙げられています。今は実行委員会を構成している団体の中で、比較的に余裕のあるところが負担をしているので、まだまだ工夫が必要なところ です。芸術祭本体としては、参加事業者が基礎体力をつければそれぞれが大きな企画や役割を担うことができるので、リスクヘッジになっています。広報は毎年一般社団法人DORという団体が担当していて、現在神戸市の広報関係の事業を担われていることが多いため、結果的に神戸市の広報事業の中で芸術祭や新長田のアート活動を取り上げてもらえることが多くなっています。そのように2015年時に共に活動してきた方々が現在では活動の幅を広げられているケースが多々あるので、協業先としても絶えず関係性は持ちながら協力していただいています。



活動を持続・発展させる仕組みについて

- Q : 活動の持続や発展のために、広報、資金繰りの仕方で工夫していることは何ですか？

BEPPU PROJECT

- A : 縦割りを超えて幅広い分野で事業を展開

活動を継続していくために、人材の雇用をするかどうか組織として大きな分かれ目になると思います。2023年現在、弊社団体ではアルバイトを含めて20名を雇用しています。また、事業を展開している分野が文化芸術にとどまらず、移住促進、観光振興、福祉や教育、産業活性など、かなり幅広いのが我々の強みです。さまざまな分野でアートやクリエイティブを軸とした事業展開をしていること、また、その多くが受託事業であることも弊社団体の特徴です。顧客も、アートファンだけでなく、市民、子ども、インバウンドなど幅広く、それぞれのターゲットに合わせた内容・手法の広報を心がけています。

Reborn-Art Festival

- A : 活動継続のためのマネタイズと広報

2015年に発足したReborn-Art Festivalの実行委員会は、宮城県や中核自治体である石巻市からの支援を得て、費用を補填しています。実行委員長の小林武史氏の影響力もあり、大企業やナショナルスポンサーからの支援が得られています。広報活動は新聞やテレビを活用しています。2019年以降、過去の本祭来場者が、常設作品に訪れる変化が見られました。これらの要素を考慮しながら、広報活動の戦略やメッセージングを工夫し、来場者の増加や興味喚起に努めています。

文化芸術と地域振興における アートの位置付けについて

● Question

アーティストの選び方や
アート作品の見せ方などを
どのようなスタンスや方針で
行っているのでしょうか？





文化芸術と地域振興におけるアートの位置付けについて

- Q：アーティストの選び方やアート作品の見せ方などを、どのようなスタンスや方針で行っているのでしょうか？

L'Aquila Film Festival

- A：コミュニティがすべての段階に関わる

LAQFFには6つの部門があり、短編から長編まで様々なジャンルの作品があります。毎年1,000本以上の応募があり、通常はLAQFFのスタッフが全作品を審査するのですが、昨年は地域の方々の協力を仰ぎました。ボランティアの市民審査員が一次選考を行い、地元の大学の映画学科の学生が二次選考を行いました。その他にも、アフリカ諸国から最近移住してきた人々のためのプログラムもあります。彼らは映画祭期間中、映画を通してイタリアの社会や文化を学びながら、彼らの文化や芸術を共有しています。LAQFF以外にも、ヴィットリーニ監督は、美術館の学芸員、地方自治体、教師など、地域のリーダーたちと直接協力し、映画を通じて地域社会に還元するための映画イベントを企画しています。

PASSAGES INSOLITES

- A：パブリックアートは都市の新しい見方を創造する

パブリックアートは都市の「サイン」として人気が高まっています。それは、新しい人々を都市に、そして彼らが普段は訪れないような場所に連れていきます。特にPASSAGES INSOLITES は、地元と世界の両方のアーティストの作品を通して、公共空間を新しい方法で体験する機会を創出しようとしています。静的および動的な作品やパフォーマンスを展示することで、長年の住民や通りすがりの観光客に対して、ケベックおよび世界的な社会問題を新しい角度から浮き彫りにしています。さらに、住民が展示会の設営やキュレーションに参加したり、EXMUROのスタッフと交流したりすることで、アートとのつながりを感じ、ひいては自分たちが住んでいる都市とのつながりを感じることができるのです。



文化芸術と地域振興におけるアートの位置付けについて

- Q：アーティストの選び方やアート作品の見せ方などを、どのようなスタンスや方針で行っているのでしょうか？

Prospect New Orleans

- A：地域の多様性を反映し 気づきや発見をもたらす

アートの選定はアーティスティック・ディレクターの裁量に委ねられており、理事会により毎サイクル新たに選定されます。理事会は、プロスペクトの価値観と街の芸術的ニーズに沿った明確なビジョンとキュレーションの枠組みを求めます。移民、人種、クィア体験などのテーマに取り組むグローバルなアーティストが選ばれることが多いです。プレゼンテーションに関しては、作品同士や展示スペースとの対話を重視。主要な映画祭以外では、「Artists of Public Memory」シリーズが、ニューオーリンズ内外のモニュメントの意味について、一般の人々に考察を促しています。住民は自らの経験や問題を振り返る機会を得て、地域の課題に向き合うきっかけを得ます。異なる背景や視点を持つアーティストとの交流から新たな気づきや発見がもたらされ、多様性を尊重しつつ課題解決に取り組むことの重要性が浮き彫りになるのです。

大地の芸術祭

- A：地域へのヒアリングと企業の地域課題との連携

トリエンナーレの開催時に、各集落へ発信したい内容や芸術祭でやりたいことがあるかアンケートを行っています。それを元に説明会とより詳細なヒアリングを実施し、その内容をディレクターやアーティストと共有することで、地域と共に芸術祭を実施してきています。また、企業が持つ地域での課題に対してアートでの課題解決を実施しています。例えば、JR飯山線アートプロジェクトでは、赤字路線の無人駅にアート作品を置くことで、駅を知ってもらい、駅を訪れてもらうきっかけとなるように連携をしました。作品の権利所有は主に実行委員会ですが、メンテナンスについては作家さんに権利があるので修繕の可否やメンテナンス方法についてアーティストと連絡をしながら進めています。



文化芸術と地域振興におけるアートの位置付けについて

- Q：アーティストの選び方やアート作品の見せ方などを、どのようなスタンスや方針で行っているのでしょうか？

みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ

- A：市民の主体的な参加が 街のにぎわいを創る

美術館大学構想というビジョンのもと、アートやデザインを軸に、アーティストやクリエイターと市民が協働して、街のにぎわいを創っています。その取り組みの代表例として、文化庁の人材育成事業で市民講座を開講し、アーティストと共にプロジェクトを実施。ビエンナーレにおいて、毎回その成果を披露しています。プログラムに参加した受講者が、各々の地域の中でプロジェクトを始めたり、場づくりやカフェなどのお店を始めたり、と、街のキーパーソンがどんどん増えてきています。街のにぎわい創りに関しては、結局、一番成果として期待されているのは、いかに人を集めるということだと思います。ただ、単に会場を提供してもらって一方的に開催するということではなく、地域から便乗企画が積極的に持ち込まれるなど、主体的な関わりが出てくるようになれば、ひとつの成果になるのだと考えています。

なら国際映画祭

- A：映画制作を通じた地域の魅力発見

映画を地域創生に活用する取り組みはまだ十分ではありませんが、映画制作により地域活性化は進んでいると考えています。地域での映画制作では、監督がその地に滞在し、行政や地域の人とお話やインタビューを行うプロセスを大切にしています。このプロセスから、地域の課題が作品の中に取り込まれて作品に反映されていると思います。これまでのNARativeプロジェクトで8作品が制作されましたが、その制作を通じて繋がった人が地域の魅力を再認識してくれるという成果も出ています。印象的な大きな成果としては、五條市で作品制作をした韓国の映画監督と映画俳優がその後それぞれ有名になったことで、韓国から日本の撮影地を見たいと、来訪者が増えた例が挙げられます。



文化芸術と地域振興におけるアートの位置付けについて

- Q：アーティストの選び方やアート作品の見せ方などを、どのようなスタンスや方針で行っているのでしょうか？

アウトクロープ

- A：地域住民の価値観が変容する機会を与えてくれるもの

秋田という一つの地域で暮らしている中で得られる体験には限りがありますが、アート、特に映像や映画ということ言えば、自分の今過ごしている場所や時間にとらわれず、全く時空の違う人の人生を擬似的に体験できるものだと思います。たとえば最近、認知症を取り扱った映画を上映した際には、在宅で介護をしていたときの辛い経験を誰にも話せず、にいた地域の住民の方が参加してくれ、「この映画を観て救われた」、「人前ではじめてこういうことを言えるようになった」ということがありました。アウトクロープシネマでは、映画の上映だけではなく、映画と関連する食体験やダイアログなどの機会の提供を通じて、観る人にとっての気づきや価値観の変容が起こるきっかけになることを大切にしています。

下町芸術祭

- A：よそ者だからできる新たな取り組みを

5回目のテーマ「Commons Huck」には、自分たち自身が“中の人”になってきて安住して来ているのでは？と思ったことが背景にあります。新長田アートコモンズ実行委員会と芸術祭の始まりは、よそ者だからこそできる新たな視点・取り組みではあったので、近年また新住民や新たな事業者さんをどんどん入れていこうとしたのが1つ目のハック性を象徴。そして、公募制にすることも、招聘ではなく公募制にして、アーティストに企画やこれまでの在り方自体に疑問符を投げかける・ハックしてもらうことを狙いました。コモンズをどんどん新陳代謝していくという取り組みとしてやっています。入ってくれたアーティストは真摯に前向きに地域を交えた芸術活動に取り組みたいというモチベーションの高い人が多くて、芸術祭に関係なく地域の行事に参加したりもしていたので、その前向きな姿勢から地域の人はずいぶん喜んでくれました。作品よりも関係性で歓迎されることが長田は多いように思います。



文化芸術と地域振興におけるアートの位置付けについて

- Q : アーティストの選び方やアート作品の見せ方などを、どのようなスタンスや方針で行っているのでしょうか？

BEPPU PROJECT

- A : アート作品を通じて別府の町を深く体験してほしい

事業の目的によっても異なりますが、地域に向き合い、別府だからこそできる作品にチャレンジしてくれるアーティストに来ていただいています。また、我々はアート作品を通じて別府の町そのものを深く体験していただきたいと思っており、美術館などの施設内よりも、屋外や古くからある建物を会場にすることが多いです。そのことで、アート作品とともに別府らしい風景がSNSなどで発信されていくことも期待しています。

Reborn-Art Festival

- A : 国内外からの参加を見据えた国際芸術祭

東京のワタリウム美術館の和多利恵津子氏、和多利浩一氏がキュレーションを担当しています。
"被災地"から始まったという一過性の話題で終わらず、継続する国際芸術祭として、来場者が入場料を支払い、満足して帰る体験を提供できるよう努力しています。
そのため、国内外のアートコミュニティからも評価されるような、アーティストをキュレーションをしています。

今後の展望について

● Question

今後のビジョンや
福島県浜通りで活動されている方々へ
メッセージがあれば 教えてください





今後の展望について

- Q：今後のビジョンや、福島県浜通りで活動されている方々へメッセージがあれば、教えてください。

L'Aquila Film Festival

- A：規模が大きくなっても、私たちのルーツは地域にある

LAQFFは、アブルッツォ・フィルム・コミッションとの緊密なコラボレーションを計画しています。ラクイラだけでなく、アブルッツォ州全体に恩恵をもたらすことを目指しています。また来年の映画祭では、市民と学生の選考プロセスを改善したいと考えています。

LAQFFのようなプロジェクトにとってコミュニティは生命線で、審査員制度がなくても、LAQFFはコミュニティのサポートに大きく依存しています。LAQFFが主催するイベントはコミュニティから好評を博し、人々はそのフィードバックやアイデアを共有します。ヴィットリーニ氏は、この好循環を維持し、コミュニティのメンバーと新しいプロジェクトで協力し続けたいと考えています。

PASSAGES INSOLITES

- A：メッセージと素材の両面から持続可能性を考える

今日のパブリックアートの重要な側面は、メッセージと素材の両面におけるサステナビリティ（持続可能性）です。アートは、人々が環境、社会、政治の大きな問題に取り組むのを助ける上で強力な役割を果たさなければなりません。また、パブリックアートは持続可能な素材で作られるべきです。サステナビリティに関連して、プロジェクトの規模とストレスを管理することが重要であり、そのためPASSAGES INSOLITESは今年、新しいプログラムと新しい名前に変更されます。年間を通してのフェスティバルになることで、スタッフの負担を軽減して事業をより持続可能なものにする予定です。



今後の展望について

- Q：今後のビジョンや、福島県浜通りで活動されている方々へメッセージがあれば、教えてください。

Prospect New Orleans

- A: 芸術祭から地域社会に貢献する存在へ

プロスペクト・ニューオーリンズは、ハリケーン・カトリナからの復興支援として始まりましたが、今では単なる芸術祭ではなく、地域社会に貢献する存在へと成長する必要があります。年間を通して一貫したプログラムを提供し、現代アート全般に対する一般の人々の理解を深めることが重要です。そのためには財政的な安定が不可欠であり、基金の設立などを通じてさらなる強化を図ります。またプロスペクトの理事会の地理的範囲を拡大することで、組織が過度に感情的な考え方を避け、フェスティバルへのビジョンを広げることができるようにしたいと考えています。

大地の芸術祭

- A：進化を続けながら 対話を重ねる

大地の芸術祭は常に進化を続け、より幅広い層に芸術祭を知ってもらえるように、そして地域の1つの財産だと市民・町民に感じてもらうように取り組んでいきたいと思っています。自分自身、芸術祭で隣接する地域とつながることで、隣接するところ、またその先にある思想、地域、住民、生活文化に触れることができたんですね。広域連携ということをするれば、身近なところで生活圏の違った文化の資源をつなげる、興味を持っていくことができます。広域連携・複数自治体の連携は合意形成までのハードルが高いこともあり、努力が必要になりますが、まずは地域と共に地道な対話を重ね、実施し続けていくこと、周囲を巻き込んでいくことが活動に取り組む上で必要な基本姿勢だと思います。



今後の展望について

- Q：今後のビジョンや、福島県浜通りで活動されている方々へメッセージがあれば、教えてください。

みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ

- A：ビジョンに対して愚直に突き進む

山形ビエンナーレは、東北芸術工科大学の、建学理念に基づいた諸活動のひとつですので、ビエンナーレのビジョンは大学のビジョンと同じものです。「TUAD vision 2024」では「地域の持続可能性に貢献する」と掲げています。今後のビジョンについても、この、理念に対して愚直に突き進める、ということに尽きると思います。それぞれのプロジェクトについて、立ち上げの目的、目標、ビジョンを明確にし、図式化し、明文化し、進んでいただければと思います。これまでの復興支援活動ですと、特に南相馬と連携したキッズアートキャンプや、福島ピクニックを開催した実績があります。福島でも「福島ビエンナーレ：風月の芸術祭」をやっていますね。本学の教員も、2023年には白河市のまちなかデザイン事業で、ワークショップや作品展示などで間接的に関わっています。本学としても何らかの形で、これからも連携、協力などでお力になればと思っています。

なら国際映画祭

- A：苦しい時こそ人とながって継続していく

今までの活動を継続することが大切だと思っています。継続をすること自体は難しいことで、想いがあってもお金がないことや、人がいないと継続ができないという現実もあります。また、災害やコロナは悲しい出来事でもあったが、映画祭・組織としては成長をした部分もありました。しんどい時こそ人とながって、1つの想いになりながら進めることで、次の世代にも活動が伝わっていくと思います。現在重点を置いている人材育成では、中学生・高校生を対象にしたユースの映画制作機会や、大学生世代の映画制作機会創出で、そこから映画監督になる人、映画祭を支える人を育てていきたいです。そして、違う場所・違うやり方であっても、同様の取り組みをする人は応援したいと思うし、仲間として一緒にやっている感覚になればと思います。



今後の展望について

- Q：今後のビジョンや、福島県浜通りで活動されている方々へメッセージがあれば、教えてください。

アウトクロープ

- A：地域の課題にワンストップで応える拠点づくり

2024年5月に秋田市内にAtle DELTAというカフェや宿泊、オフィスの機能をもつ複合拠点をオープンします。ここでは、社会課題解決やクリエイションをキーワードに、人が集まり、地域に新しい流れを生み出す場を目指しています。これまでも映像やブランディングの事業は多くやらせてもらったところなのですが、より幅広く地域で活動している人たちの支援をしていくためにも、自分たちが持ち合わせていない専門性を持った人が集うような拠点としていきたいと思っています。これまでは東京のような大きな都市の人材に頼っていた部分も、自分たちの仲間としてつながっている人たちで解決できるような体制を築いていきたいと思っています。

下町芸術祭

- A：常に視点の転換を

地域の方と協力して開催することには変わらないですが、表向きに見えるものとして、今までやってきたものとは違うものを作りたいとも思っています。これまでのフォームや変遷を踏まえつつ、新たな挑戦をしたいと思っています。そのことが、また新たに人を呼び込むきっかけになると考えています。ローカル（またはグローバル）な地域や国が抱える社会問題や課題を扱って、価値や意義あるいは問題提起をプレゼンするタイプの芸術祭が多くありますが、本芸術祭はそれらとは異なる性質を持っていると認識しています。まず地域の人たちがどのように芸術や活動を受容するのかに注目したいと考えています。そしてマイクロプロジェクトだからこその小回りの良さにより、社会的な情勢などにも適応しながら柔軟に展開して行きたいと思っています。そしてマイクロプロジェクトとして、手触りの実感できる公共圏で互いの違いを理解し関係をじっくり醸成していく芸術祭を目指します。



今後の展望について

- Q：今後のビジョンや、福島県浜通りで活動されている方々へメッセージがあれば、教えてください。

BEPPU PROJECT

- A：新しい何かに挑戦できる可能性に開かれている町でありたい

「別府と言えば温泉とアート」ということがようやく認知されるようになってきました。こうした状況も踏まえて、別府市ではアーティストやクリエイターの移住をさらに進めていく姿勢を打ち出しています。アーティストたちが移住・定住するためには、制作場所などのハードを増やしていくこと、そして同時に、ソフト面を充実させることも必要です。アーティストたちが能力を発揮しながら生きていける町であるために、たとえば人々がアーティストに出会い、彼らを応援する意味で作品を購入できる場として「Art Fair Beppu」を始めました。他にも、福祉や教育の現場にアーティストが関わることで別府ならではのユニークなサービスを提供することにも挑戦したいです。この町ではいつも新しい何かが創られている、新しい何かに挑戦できる可能性に開かれている、別府はそんな面白い町であるということを発信し、地域のブランド向上に繋がりたいです。

地域が面白くなってこそ、世界はもっと面白くなると思っています。福島 of 皆さんとも情報交換しながら、ともに世界を面白くしていきたいです。

Reborn-Art Festival

- A：クリエイティブに妥協せず 可能性の土壌を作る

ローカルの未来においては、単なるわかりやすさや経済効果ではなく、可能性を感じられる場所に面白い人や優秀な人が集まることで、未来が作られると信じています。

福島は他の東北の被災地以上に大変な事情があるわけですが、だからこそ、クリエイティブへのリスペクトが必要不可欠だと思います。そして、私もその強い思いを胸に ISHINOMAKI 2.0を立ち上げ、小林氏というギフトと出会いました。福島の皆さんに、アーティストたちとの経験や、必要な情報を喜んで届けたいと思います。

CREDIT



企画

経済産業省 福島芸術文化推進室

制作

株式会社ロフトワーク

事業アドバイザー

- ・ 本田 勝之助（本田屋本店有限会社 代表取締役）
- ・ 関口 正洋（株式会社アートフロントギャラリー）

調査協力

L'Aquila Film Festival / PASSAGES INSOLITES / Prospect New Orleans
大地の芸術祭 / みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ / なら国際映画祭
アウトクロップ / 下町芸術祭 / BEPPU PROJECT / Reborn-Art Festival

視察協力

小高パイオニアヴィレッジ / 大熊インキュベーションセンター / 図図倉庫

座談会／編集会議 協力

双葉町産業交流センター / J ヴィレッジ / ご参加いただいた皆さま

グラフィックレコーディング

松田 海

コピーライティング（ハマカラMAP）

奥村 サヤ

デザイン

ほそかわなつき

イラストレーション

Asuka Okajima

山里 美紀子